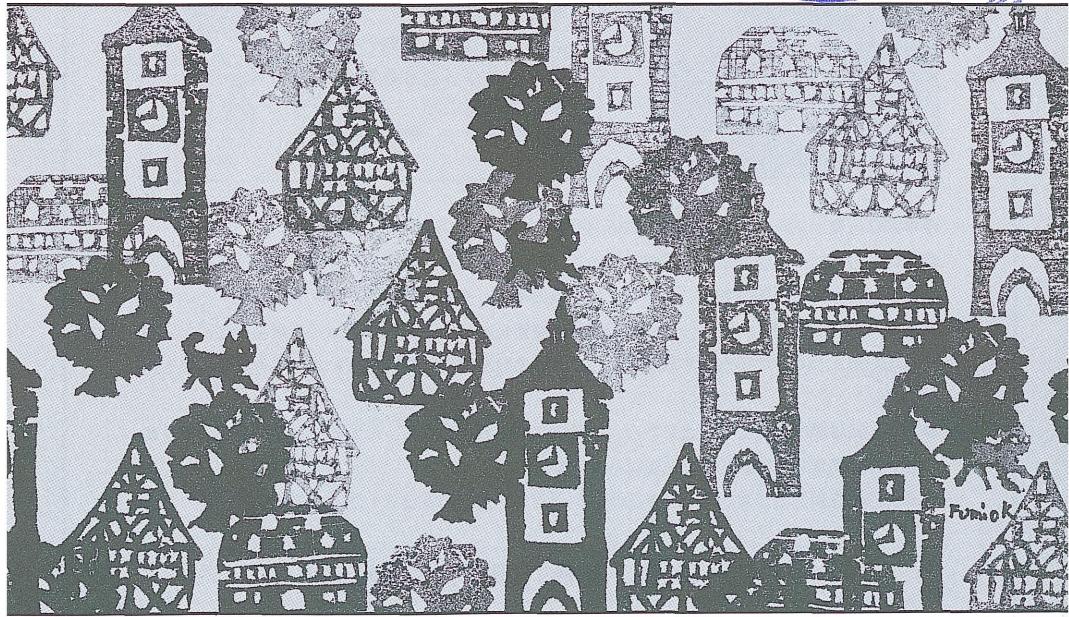


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1991

2



第90巻 第2号 日本幼稚園協会

保育者と母親へのメッセージ

かえるの学校

高橋系吾・著



★内容の一部★

その一言
育児ないないづくし
子どもないないづくし
当世若者ないないづくし
父親ないないづくし
母親ないないづくし
叱り方・ほめ方
よい子を育てる子育て五則
子どもをダメにする育児
よい子の育て方
園長の願い……等109項目



- 本書は著者が50年の教育生活の中で折々に感じたことをまとめた短文集です。
- 保育への想いが短い文章で表現されていて、著者の子どもを愛する心が強く伝わってきます。
- 子どもの歌には「雀の学校」があり「めだかの学校」もありますが、「かえるの学校」というタイトルがないので、子ども一人一人の遊びを尊重したい意味を含めて、この書名がつけられました。ちょうどかえるたちの歌声のように子どもたちがカーバイに遊んでいる姿を集めたものです。
- これは幼稚園の玄関に掲示されたり、掛け状に書かれたりして、心あるご父母の方々、学生の皆さんに読まれ、好評を得たものばかりです。
- 本書には各頁にたじまじろう先生の楽しい子どもの遊びのイラストが入っています。

B6判・144頁・定価1,000円(消費税込み)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第90卷 第2号

幼児の教育 目次

第九十卷 第二号

次

© 1991
日本幼稚園協会

△巻頭言△

幼児に信頼される保育者……………岡田 正章……………(4)

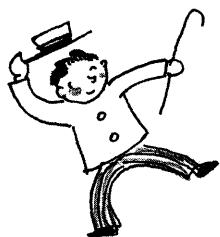
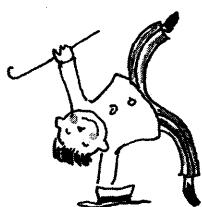
韓国幼児教育学会における講演 (一)

幼児保護と教育の政策……………津守 真……………(6)

よし藤・子ども浮世絵に見る児童観……………中村 光夫……………(13)

絵本の世界(1)

『わすれられないおくりもの』をめぐって……………高原 典子……………(28)



ある日の育児日記から(2).....

佐藤 和代 (36)

チエコ便り(7)

プラハの冬のくらし.....大桿 優子 (37)

言語障害の臨床研究ノート(6) 終章

村上 敏子 (42)

心が育つということ その(5)

幼児の持つ「内一外」意識の変容をめぐって.....豊田 一秀 (51)

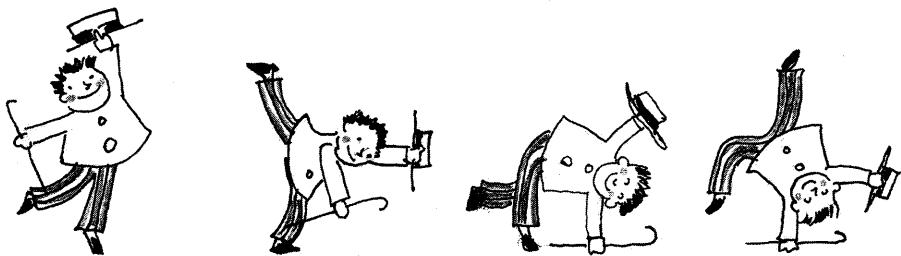
豊田 一秀 (51)

表紙版画・樺村 文夫
扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／豊田 一秀・吉岡 晶子
編集部・大沢 啓子



幼児に信頼される保育者

岡田 正章

てしまうものとして断固認められないはずのものである。

学生は「信頼される先生」の一つの属性として「えこひいきをしない先生」を挙げている。これは、小学生以上の子どもに対する関係とは限らない。どの子どもからも親しみのある先生として受け入れられているだろうか。當時、自己の言動を反省したい。

新幼稚園教育要領・新保育所保育指針は何れも旧のものに書かれていなかつたが、保育の基本原理として、保育者が子どもとの間に十分な信頼関係を築くことを明記している。

これは、従来の保育においても当然のことであつたはずである。そのことが敢えて今回の両者に明記されたのは、これまでの保育実践において不十分であつたことによつたのであろうか。保育にかかる先生がいることだけは、ある子どもを絶対にだめにし

学生に「今まで教わった先生のなかで、どんな先生がいい先生だったか」とたずねると、多くの学生が「話をよく聞いてくれる先生」と答えた。逆に「嫌な先生」は「自分の方から言うだけで、自分たちの話を聞いてくれない先生」「えこひいきをする先生」という答えが多かった。

先生も一人の弱い人間であるから、どこかに欠けたところのあることはやむを得ない。しかし、子どもを自分の好悪で差別する「えこひいき」をする先生がいることだけは、ある子どもを絶対にだめにし

保育実習を終わった学生に、「子どもから信頼される保育者とは」と自由記述されたものから、純粹・新鮮・真剣さにもとづくものとして多くの示唆を受けた。その一端を記し、改めて自己自身への問い合わせとしての資としてみたい。

○子どもの言つてくることを真剣に聞き、受けとめる。できるだけ「後でね」と言うことを少なくする。

○子どものしていることをよく見つめ、適切に認めたり、励ましたりする。たとえば子どもの遊んだり仕事をしている姿を遠くから見ているときでも、子どもがなし遂げて保育者の近くにやつてきたならば、「面白かった！ よくやつたね！」などと言葉をかけることは、子どもに先生のやさしさを感じさせ、心と心の結びつきを太いものにする。

○子どもに保育者の方から話しかける。単に指示や禁止でなく、また、二人以上の子どもに対する言

葉だけでなく、一人一人に対し、その子どもの気持ちを大切にした話しかけをする。それは、子どもに心理的負担とならないものであり、保育者が自分のことをわかつてくれていると感ずることのできるようなものでなければならない。

そのほか、笑顔、スキンシップを大切にする、子どもと交わした約束を必ず守る、子どもが困っているときは援助する、子どもの喜び・悲しみを共感する、子どものすることに感動できるなどなど、ともすればマンネリ化のなかで見失い、怠つているところを見つめなおし、真に子どもたちから信頼される保育者ばかりの幼稚園・保育所となってほしい。

愛情をもつ、子どもを人間として信頼するなどの抽象命題とともに、その具体的な在り方に自らを律することを自らの課題とすることが必要である。

(明星大学)

韓国幼児教育学会における講演 (一)

— 幼児保護と教育の政策 —

津守 真

△本誌12月号に記したように、韓国ではいま幼・保二元化の制度が進められようとしている。この講演は一九九〇年九月八日に、韓国幼児教育学会の要請によって行われた。講演は李相琴女史の通訳のもとになされ、講演題を同女史がつけられた。私としては、幼・保の視点から戦後の保育を省みるよい機会であつた。△

今日の私の講演は、制度を中心にして日本の幼児教育

す。

のこの四十五年間の歩みについてです。私自身幼児教育を専攻するものとしてこの間を生きて来ましたので、この間に私が体験し考えたことをお話ししたいと思いま

1 日本の幼児教育 (care and education) の歴史的

(1) 一九六〇年以前

東京女子師範学校に国立の幼稚園ができたのが一八七六年で、すでに百四年を経ています。保育園は一八九七年に私立の最初の保育園ができました。それから九年余りになります。両者はずっと葛藤なく両立していましたが、一九四七年に、学校教育法と児童福祉法が出来て以来、はつきり二元化し、従来託児所と呼ばれていたものが保育所と改称されました。

一九四五年、日本は第二次世界大戦に敗れて、教育においても国家主義の教育から民主主義の教育へと転換しました。一九四七年に教育基本法および学校教育法が制定されました。教育基本法には、教育の目的は人格の完成と平和的な国家および社会の形成にあると明記されています。それが実際に実現されたとはいえませんが、私はこれが日本の教育の新しい出発点だと思います。この法律によつて幼稚園は学校教育の一環となりました。そして一九四八年には、幼稚園の教育の実際の手引きとして、文部省より『保育要領』が出されました。

保育要領は、米国の占領軍の指導のもとに日本側の委員と協力して作られました。これを読むと幼稚園と保育所の保育の実際はどうすればよいかが具体的によくわかれます。また幼稚園の一日、保育所の一日、家庭の一日の保育の実例が示されています。この保育要領は、歴史的にみるならば、米国の進歩主義教育のガイドブックがモデルであるといえます。

一九五六六年に、文部省は『保育要領』にかえて『幼稚園教育要領』を制定しました。小学校以上の学習指導要領が、単なる手引き的な指導書から国の定める基準を示すものに改訂されたことに伴い、学校教育の一環である幼稚園の指導書もそれにあわせることが必要でした。また、その頃は幼稚園の教師は小学校の教師より程度が高いと考えられており、いろいろの面で小学校にひけをとらないものにせねばならないという焦りが幼児教育関係者の中にはありました。新しく作られた幼稚園教育要領は、教育内容を六領域に分け、それぞれについて幼児の発達上の特質と望ましい経験を列举したものでした。そ

して保育の実際に当たつては、これらの要素が洩れなく含まれるよう計画する事が必要とされました。この六

領域はしばしば小学校の教科と同じものと誤解されました。保育要領を読むと幼児の姿がいきいきと浮かび上がるのに対し、この教育要領を見ても幼児の姿が見えて来ません。保育要領が幼児の実際に即したものであったのに対し、教育要領は論理的に構成した枠組みに実際を合わせようとしたといえるでしょう。

せっかく保育要領という実際的な手引書があつたのに、また、教育課程の編成は各幼稚園において行うものと明示されているにもかかわらず、こののち日本の幼稚園教育は進歩主義教育以前の画一的な保育へと後戻りしたのではないかと私は思います。もちろんこの間にも、遊びを主とする幼稚園をつくろうと努力していた人々も少なからずあつたことは付け加えておかねばなりません。この間、保育園も同じ保育要領を使つて保育をしており、事情は似たようなものでした。

(2) 一九六〇～一九七〇年代

一九六〇年頃から早期知的教育論が盛んになりました。これにはいくつかの理由があります。第一は、スプートニック人工衛星の打ち上げ以来、米ソの間に科学教育競争がはじまり、自由主義教育ではあきたらず、知的能力促進のための効果が求められたことです。第二は、科学的心理学の進歩により、認知能力の効果的学习プログラムの研究が進んだこと、第三は、とくに米国で、貧困や文化的悪条件の環境に育つ子どもに、知的教育を強化するプログラムが大規模になされたことなどです。

日本でも一九六〇年代、一九七〇年代には、早期知的教育論が盛んで、遊びを主とする幼稚園は非常に批判を受けました。この時代は保育の実践者にとって実に憂鬱な時期だったと、私はその時代を経てきて思います。いろいろな実験室で作られたプログラムを保育者が学び、それを子どもに適用するのが保育の実践であるという考え方が出てきた時代でした。それらのプログラムは、時間割りをきめて、集団で同じ教材を用いて一齊に行われ

ました。また、遊びは学習に効果がある限りにおいて意味があるのであって、他の方法のほうが効果があるのでならば、遊びはやめたほうがいいという考えすら出て来ました。遊ぶということが幼児が生きる生活の形態であることを無視した考え方です。そして子どもを見て考えながらすすめていくような保育の実際は、地をはいざりまるような非科学的な保育だと批判されました。しかし、この間にも子どもと生活を共にする保育者は絶えることはありませんでした。

私は子どもとて、いねいにつきあところから開かれていく保育のダイナミクスに魅かれ、これを欠いたら幼稚園はその最も本質的なものを失うのではないかという懸念を抱きつづけました。時間割りで遊びをえていくのではなく、子どもたちの中にある生命的な力によって変化する姿をどうすれば実証的に示すことができるかというのが、私の長い間の課題でした。

一九六四年に『幼稚園教育要領』が改訂されたのは丁度こういうときでした。この改訂では、以前の教育要領

とほぼ同じ考え方でつくられていますが、各領域について、幼稚園修了までに幼児に指導することが望ましい『ねらい』が細かく示されていました。

他方、保育所はどうかというと、日本の制度では、幼稚園は学校教育の一環として文部省の管轄下にあり、保育所は、保育に欠ける乳幼児を保育すること目的とする児童福祉法の施設で、厚生省の管轄下にあります。

同じ幼稚期にある子どもなのに、そのいずれにゆくかによって、受ける保育の質が違うとしたらおかしなことです。どちらにゆくにせよ、それぞれの子どもが最善の発達をするように保育されねばなりません。戦後初期の指導者たちは、幼・保一元化を主張する者が大部分でした。しかし制度が二つに分かれて出発したために、種々の問題が生まれてきました。幼稚園は教育し、保育所は保育する所と考える人々が次第に増えてきました。幼稚園の教師は、保育所では子守りをしているだけだと言ひ、保育所の保母は、幼稚園では学習ばかりして子ども

を遊ばせないと言い合いました。免許証や養成機関の面でも両者は別々です。

地方小都市、町村では、幼稚園と保育所と両方を設置することができず、その点でも混乱を生じました。

しかし、保育内容では両者には共通なものが多いので、一九六三年に、文部省、厚生省の両局長共同の通達が出され、『保育所の持つ機能のうち、教育に関するものは、幼稚園教育要領に準ずることが望ましい』とされました。

こういう状況の下に、一九六五年に、『保育所保育指針』が厚生省によって作成されました。そこでは、『養護と教育とが一体となつて、豊かな人間性をもつた子どもを育成するところに、保育所における保育の基本的性格がある』ことが強調されています。また、保育所ではとくに、家庭と同じようなくつろいだ雰囲気が必要なことを強調すると共に、三歳以後については、幼稚園と保育所とは共通の内容をもつよう構成されています。



になっていることに対して、一九七五年には、行政管理は幼稚園と保育所の実情について全国的な調査を行いました。そして、『児童の保育および教育に関する行政監察結果に基づく勧告』が出されました。そこでは、文部省、厚生省は、いずれも『全乳幼児に係わる問題を一元的に所管していない』ので、両方共に十分な機能を発

揮していないことが指摘されました。そして、『家庭及び乳幼児全体の立場に立脚して、福祉と教育にまたがる基本的な問題を検討す』べきことが勧告されました。このような経緯があるにもかかわらず、このことはその後進展していません。一九四七年に出発した幼・保二つの制度は、一元化の方向の意見が多く提出されたにもかかわらず、四十年以上たった今日もなお、解決されないままです。

一九六〇年代、一九七〇年代は、日本の経済の高度成長期にあたり、幼稚園、保育所ともに施設数および園児数が急激に増加した時期でした。施設の急激な増加は social lag を引き起こします。すなわち、人々は過去の歴史から本質を学ぶ暇がなく、その時の社会的要請と流行に左右されて動きます。

この時期にはまさにこのことが起つたのだと思います。

一九八〇年頃より日本の社会全体に大きな変化が起きました。子どもに直接関係のあることだけを挙げても次のようなことがあります。

○ 住宅環境の変化……生まれて間もなくから高層住宅で育つ子どもが多くなりました。幼稚園に入るまでひとりで戸外にいった体験の無い子どもが増えてきました。

○ 老齢化……人の寿命が延び、壮年期を超えて老年期に達した人が多くなりました。かつては壮年期に有能であることが幼児期の教育の目標になりましたが、そう考えた人々自身が老年期に達し、老年期の幸福が幼児期と関係が深いことが分かつてきました。

○ 働く母親の増加……保育所のみでなく、幼稚園でも長時間保育の要求が増してきました。また、これまで家庭で普通に経験していたことを、幼稚園で経験する必要になりました。たとえば、ぶらぶら過ごすことや、街のお店に買い物に行くことなどです。

しく減少しました。障害児の統合保育も進み、ほとんどのが幼稚園または保育園に行くようになりました。

当然、いろいろの個性の子どもが入ってくるわけで、幼稚園はそれぞれの子どもが個性に応じて成長するように工夫せねばならなくなりました。

このような環境の変化の中で最も生活を脅かされたのは子どもです。多くの子どもたちが遊ぶ場所や時間を奪われただけでなく、これまで家庭の中で与えられていたねんごろな保育を受けることができなくなりました。家庭の外の幼児保育施設がその部分を引き受けねばなりません。幼稚園や保育所が子どもの主体的な生活を回復しなかつたら、子どもたちが人間として成長する場がどこにあるでしょう。

この間に知的早期教育も二十年間の実験教育の経験を経て、人々の間にかなり共通の評価ができきました。すなわち、知的能力促進のプログラムは、その点だけに限定して見るならば効果が認められるが、その効果は永続的でないことです。数や文字のある期間訓練するなら

ば、数か月は効果があるけれども、その後は、訓練しない子どもも同じになってしまいます。更にそれ以上に、学校教育が浅薄な知識教育にのみ目を奪われて、子どもたちの心が育っていないことへの反省が起きました。また、学校が規則や管理に縛られて、その結果、学校嫌いや神経症、子どもの自殺などを生み出しました。これらの反省から多くの人々が、知的な面からだけでなく、全人的な面から子どもを見るとの必要を認めるよくなつたといえるでしょう。

——つづく——

(愛育養護学校)

よし藤・子ども浮世絵に見る

児童観

中村光夫

一・よし藤・子ども浮世絵とは

ここに紹介しました絵は「国麿」という画家が描いた『しん板男一代記』(図①)という絵の一部です。明治十二年に発行された絵ですが、その頃の男子の一生を十五の場面で描いてい るのですが、子どもの時代を表す場面で楽しそうに遊ぶ子どもたちの中に、ひとり寝転んで絵を見ている子どもがいます。この「えあそび」と題する絵の中で男の子が手に持っているものは、その頃、「絵草紙(えぞうし)」と呼ばれて江戸(東京)の町中の子どもたちの間ではやつた子どものための一枚絵なので



▲図① 『しん板男一代記』

す。今の子どもたちがファミコンやビッククリマシン一発に夢中になっているように、江戸の町の子どもたちもこの絵草紙に熱中していたのです。

こんな子どもたちのようすは中勘助の『銀の匙』（岩波文庫版四十八ページ）や鎌木清方の『こしかたの記』（三十二ページ）などに、自らの子ども時代の思い出として生き生きと書き表されていますが、（身近なお年寄りの中にもいらっしゃるかもしれません）、江戸の終わりごろから明治の末までの東京の子どもたちの大切な娯楽のひとつだったようです。

これらの「絵草紙」（人によつては、「手遊絵」とか「おもちゃ絵」とか呼んでいたようですが）を描いたのは、当時、民衆の中に流行した「浮世絵」といわれた多色刷り木版画の画工たちでした。そして、それらの画家の中にひときわ人気の高い画家がいました。それが「よし藤」でした。

この「よし藤」という画家については、そのころの画家の地位は大変低かったのでしょうか、記録には残らな

いことが多いようで（日本を代表する浮世絵師喜多川歌麿でさえ出身地が不明なのです）、当時の浮世絵師たちの人名辞典である『浮世絵類考』という本の中の記述しか資料は無いのです。それによると、文政十一年（一八二八年）に生まれ、名前（俗称）を西村藤太郎といい、歌川国芳の門人として一鵬斎芳藤という号（ペンネーム）を持ち、本郷春木町に住み後に浅草北三筋町に移り、明治二〇年（一八八七年）に没したということです。これ以外にはエピソードが少し記録に残されているに過ぎません。やや長い文章ですが、よし藤の人となりを理解する上で参考になると思いますので紹介します。

かつて芳藤の絵を出版して居た馬喰町三丁目、樋口絵草紙店主の談に依ると、或年同店で三枚続きの組上燈籠の下絵を依頼したが、数日を経るも下絵を届けて来ない。同人の氣質を知つて居る主人はそのままにして待つて居たが、余り長くなるので催促をした。すると二・三日経つて芳藤が自身で下絵を持って来た。主人は数日費やして描き上げ

たのであるから、直に彫刻師へ廻せると思つて居ると、芳藤は一旦渡した絵を披いて居たが、未だ氣に入らぬ箇所があるのであるから訂正して二・三日の内に届けると言つた。其折主人が

「先生こんな絵は左様丁寧の事は要りますまい」

と言ふと芳藤は頭を振つて

「左様でありません。私は死んでも、絵は後に遺るものですから、自分の気に入ったものでなければ、板にはかけられません。」

と、話されたと樋口氏より聴いた事があつた。此言葉によるも芳藤の抱負を知る事が出来よう。

芳藤は手遊絵の顧客が児童を中心として居る事に留意して、取材に苦心した事は勿論であるが、生来凝性の彼は微細な事でも（児童と同様の氣分に）徹底するまで研究をせねば止まなかつた。それ故随分奇行もあつた様である。

或年の冬、朝起ると直に寝衣のまま房楊子をくわへて、洗湯に出懸たが正午近くになつても戻らぬので、家人は心配して居ると空腹になつたといつて帰つて來た。家人が何

方へ行かれたと、尋ねると、近所の知人に急用を憶ひ出したので立寄つて來たと言ふたが、其実彼は湯屋の近所まで行くと獅子舞が賑かにはやし立てゝ居たので児童と共に其後に付いて拍子を取りながら歩いて居たが、朝湯に出たのに気がついた彼は慌てゝ入浴を済ませて帰つたのである事が後に判つた。此外物売の後をついて歩いて呼声の研究をする為に肝心の用事を忘れたり、祭礼に神樂屋台の前へ立つて身振手振をして傍の人に笑はれた事などは数回あつた相だ。

（『浮世絵』五号 大正四年十月号より）

この外に、「いせ辰」という千代紙屋のご主人である広瀬辰五郎さんの文（『おもちゃ絵』徳間書店刊）・著名な絵本研究家である瀬田貞一さんの文（『落穂ひろい福音館刊』）・米国人として日本の子どもの文化を研究されている法政大学の先生アン・ヘリングさんの文（『季刊銀花二二号』文化出版局刊）などでもよし藤の仕事の内容や意義を知ることができます。が、いずれもよし藤の業績を高く評価しているのです。

わたしもこれまで少しばかりのよし藤作品を知る機会

をもって来ましたが、とても楽しく、また大変に魅力があり大好きです。そこで、よし藤作品がもつ意義・特色・魅力などを作品を見ながら探ってみたいと思います。

二、よし藤作品の意義

▲図②『みなさんよくおあそびよ』



(一) 童心性

よし藤の作品の特徴の第一にあげられるのは、そのあふれるばかりの童心性にあると思います。つまり、子どもたちのありのままの姿をとても大切にしてくれているのです。

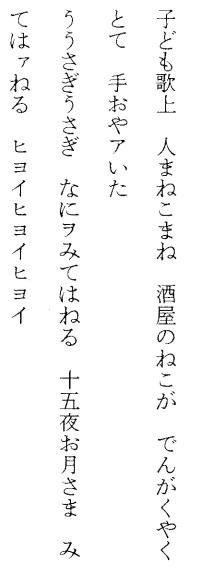
ここにあるのは『みなさんよくおあそびよ』(図②)と題した作品で、万延一年（一八六〇年）に発行されたものの復刻版ですが、(よし藤作品は没後、何回か復刻されているようです)江戸末期の子どもたちの遊ぶ姿が生き生きと表情豊かに描かれています。絵の中に、子どもたちの話した言葉が書き込まれていますが、とても自然で可愛らしく見ていてほほえましく思います。こんな言葉なのです。

せうもん（しょうもん）つけろつける。となりへいけ。
おしだおしだ、てけれつてん。こらこら、すてんすて
ん、どんどん。たまや、たまや、たまや、ぱんぱん。よい
よいよい。イヤア、あける、あける、あける。ヤアイ、や

れやれ。おゝいせいがいゝなア。ハチャヤイ、おれといせう（いつしょ）にこいやい。ありや、じんぢん。だれだとおもふ、かとふきよまさ（加藤清正）だ。ありや、ありや、ありや。おやまの大せう（大将）、おれひとり。おふわたこい、まゝくはせう（飯食わしよう）。竹ざはとうじ（当時のコマ回しの名人か）だ、みんなみろ。きお（今日）は二八日、おしりのよふじん（用心）、こおよふじん（ご用心）。あんまめくらに、あたつたらごめんよ。どつこい、ヤイ、きんこ、ひどくするな。たけ馬だ、わきよれわきよれ、くるまくるま。ゑんがやゑんが、きんぼおはゑんが。

図③は『新板子供歌尽』という明治十七年に発行された作品ですが、当時の子どもたちが歌っていた唄が絵入りで紹介されています。コマの最初と最後が表紙の絵になっていますから、横に一列ずつ切り離して折り曲げてつなげると、小さな歌集ができるようになります……。

今でも歌い継がれている唄も見られますから、「わらべ唄」の研究資料としても貴重な作品といえましょう。



▶図③ 「新板子供歌尽」



たこたこあがれ あがッたらにてくおう さがッたらやい
てくおう

おふさむこさむ 山から子ぞふがとんできた なんとてな
いてきた さむとてなってきた

おでこころんでも はなぶたず あめがあつてもかさいら
ず

やんまううし あかとんぼ たかやんまはッこ ひくやん
まおりろ あつちゑ行くと んんまがしょる こッちへく
ると ゆるしてやるぞ

きょうわ二十八日 おしりの用じんにふよおじん あした
わおかめの だんごの日

あの子アどこの子 てうちんやのまま子 あがッてあすべ
ちやわんのかけで あたまこッきりはツてやれ

おふわたこいいこい まゝくわしよふ まんまがいやなら
くわしやろな

あのあねさん いゝあねさん おしりがちいとまがッて
さかい町のまん中で あかいものつんだした

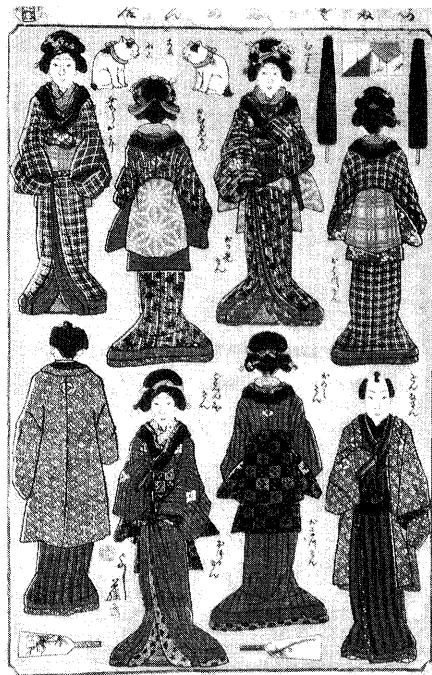
桃くり三ねん かき八ねん ゆづは九年でなりかかる

ゆうやけこやけ あしたわ天きになアれ
こうもうこもうこじこじ 柳のしだですうのませう

図(4)は『あね様両面合』という作品です。旦那さん・

おかみさんのおまつ・ごしんぞさんのおつる・むすめの
おはつ・女ちゅうのおたけの四人とねこ・かさ・ようじ

▲図(4) 『あね様両面合』



さし・羽子板を前と後から描いてあります。切り取って貼り合わせて姉様ごっこを楽しんだものでしょう。

左下の検閲印が文久二年（一八六二年）のものですので、江戸末期の商家の家族のようすを偲ぶことのできる作品といえます。

（二）ユーモア性

▲図⑤『行水猫のたわむれ』



▶図⑥『しん板ほうづきあそび』



よし藤作品の特質の二番目として挙げられるのはそのユーモア性です。動物や曲芸・なぞなぞなどを使って子どもたちを心の底から楽しませてくれています。

図⑤は『行水猫のたわむれ』という作品で、町のお風呂屋のありさまを「人」を「猫」に代えて描いている絵です。動きや言葉書きがとても生き生きとしていますし、入浴中の裸の姿の人々の顔がかわいらしい猫になつ

表1 「しん板ほうづきあそび」

ていますので、絵全体が自然でほほえましく感じられます。

図⑥は『しん板ほうづきあそび』という作品です。赤

いほおづきの実を人の代わりに描いている絵ですが、絵の中の言葉も楽しくユーモラスです。こんなふうなので

す……。
△表1△

図⑦の作品は『しん板変化かるわざづくり』という作品です。動物や人が組んでさまざまな軽業を演じて、ま

図⑦の作品は『しん板変化かるわざづくり』という作品です。動物や人が組んでさまざまな軽業を演じていますが、子どもたちの夢を描いた作品といえましょう。

図⑧は『東西角力のほんじもの』という作品です。何かおかしな絵がたくさん描かれていますが、これらの絵は当時の「おすもーさん」の名前を表しているのです。

ものが多く見られます。

図⑨は『しん板冬物いせう』という題がついています
が、「あね様人形」の衣装集の絵です。切り取って人形
の頭に着せて、お人形遊びをしたものでしそうが、女の
子たちは楽しみながら「手技」を身につけていったこと
でしそう。図⑩はその出来上がり予想図です。

図⑪は『組上ヶ堀枚物・里見八犬伝ホッタン』とい



► ⑦図『しん板変化かるわざづくし』

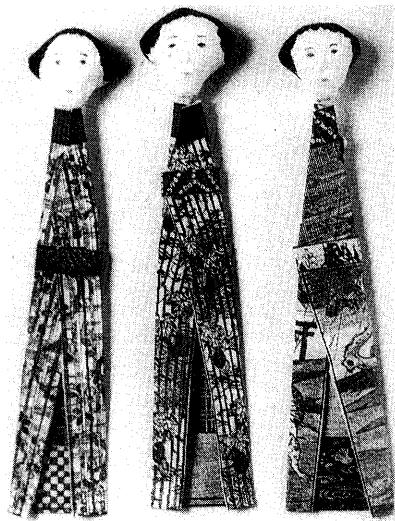
「くもせやま」（中央右）・「ともづな」（左下）・「ひ
でのやま」（中央の女と犬の絵）・「つるぎさん」（右
上の木を釣る男の絵）などと読み取るそですが、とて
もユーモアあふれる作品といえましょう。



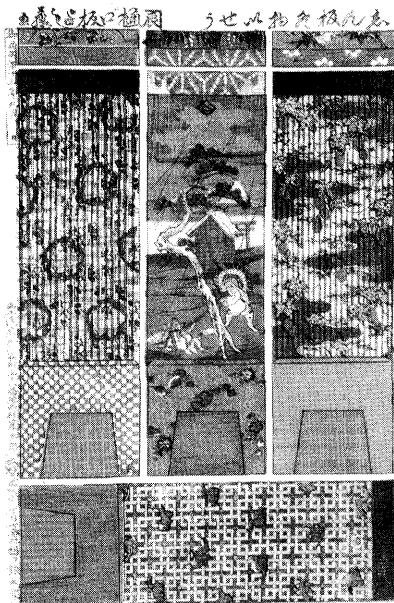
► ⑧『東西角力のはんじもの』

よし藤の作品の中に、ハサミで切り取って作り上げる

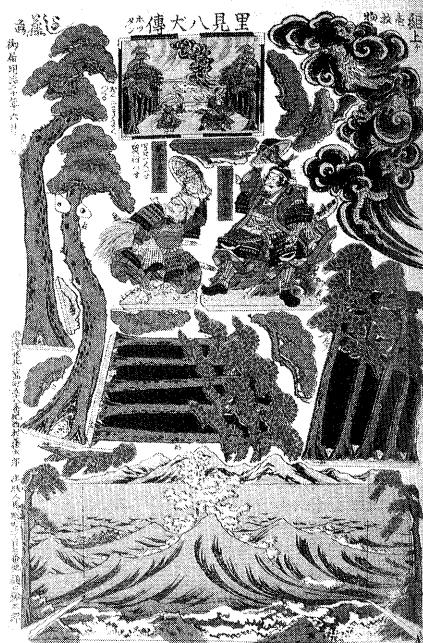
(三) 技巧性



▲図⑩ あね様人形



▲図⑨ 「しん板冬物いせう」



▼図⑪ 「組上ヶ壱枚物・里見八犬伝ホッタン」

作品です。「こま」まとした絵が描かれていますが、これらの絵を丁寧に切り取りノリシロにノリを付け、立てて並べると舞台の場面ができるようになっているものです。よし藤はこんな歌舞伎の名場面や建物・店などの「組上絵」を二十以上も残しているのです。

四 実学主義

よし藤の作品の特徴の最後は、子どもたちに、生きていくために必要な「知識」や「知恵」を授けてくれているところにあると思います。

図⑫は『鳥づくし』ですが、このような生物や道具などをたくさん描いた作品がいくつかあるのです。今でいう「図鑑」でしょうが、当時の子どもたちはこのような



▲図⑫『鳥づくし』

作品から「知識」を学習していくのではないでしょ
うか。

図⑬は『しん板婦人手わざ尽』という作品です。一八五〇年ころの江戸の町の婦人たちの日常生活が四二点も描かれている図ですが、当時の少女たちは、こんな絵を見る中から知らず知らずのうちに「自分たちの将来像」や「必要な手技の種類」などをイメージ化していく



▲図⑬『しん板婦人手わざ尽』

たことでしょう。

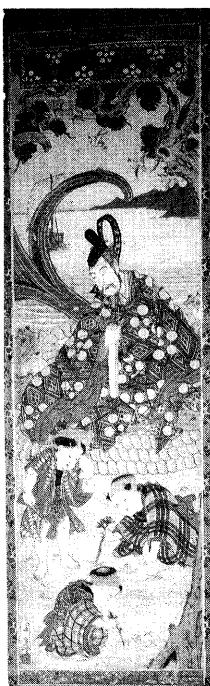
図⑭は『世たい道具みようと合』という作品です。人間の顔を日常使われる生活道具に代えて、二つずつ組み合わせて描き、夫婦間の会話をさせている絵です。

子どもたちはこんな絵を見ているうちに「夫婦や男女の在り方」を学んでいったことでしょう。△表2△

▲図⑭『世たい道具みようと合』



▲図⑮ 軸『大宰府天満宮』



図⑯は学問の神様「菅原道真」が漁村の子どもたちが砂に字を書いている所を優しく見守っている絵です。

「一字千金當」という文字が見られますか、学ぶことの大切さを当時の子どもたちに諭した絵でしょう。

三、よし藤の子ども浮世絵から何を学ぶか

これまで見てきたように、よし藤の子ども浮世絵にはいくつかの優れた点を指摘することができますが、これらをまとめると、よし藤がいちばん語りたかったこと、それは、「子どもたちよ、健全な市民になれ!」という

表2 『世たい道具みようと合』

| | | | | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|---|---|--|
| これから なにぶん たのみます | ふしぎな ごえんで ござります | ほんにマア はなおは わたしが すげませう | おとつさん おさきへ あげよふねへ それからほうのだ | お茶こいちやの なかじやもの なつかしやの | おれはいいから ぱうが たんとたべな |
| おとつちゃん おとつちゃん ができるよ | そらぼうや かわいがつて くださんせ | こうして わたしの心 | はうや今 しら玉水お あけよふか | 思いなおして おやざとへ みおしのぶ | いろもかもある すいたどし すいなうきよに やはらしく |
| そふかおツかさん いいなよ | おとつちゃん おとつちゃん ができるよ | きよだいよりも みせたい わたしの心 | さあでてゆきアがれ このおたふくめ | 思いなおして おやざとへ みおしのぶ | いろもかもある すいたどし すいなうきよに やはらしく |
| そふかおツかさん いいなよ | うちはどふしの この中じやもの ものでない | さあでてゆきアがれ このおたふくめ | 思いなおして おやざとへ みおしのぶ | 思いなおして おやざとへ みおしのぶ | いろもかもある すいたどし すいなうきよに やはらしく |
| しきょうき | あづけてくんな | いろでいいしも きのふさふ | まくらならべて ねるぞへ | まくらならべて ねるぞへ | まくらならべて ねるぞへ |
| さあどおもしろ ぶつならぶて いるものかいな アが | まあまあまあ そのたんかわ わっちに | おふぎに おせはに | じやとゆうて おまへには おはぐろつほとゆう 夫がある | じやとゆうて おまへには おはぐろつほとゆう 夫がある | じやとゆうて おまへには おはぐろつほとゆう 夫がある |
| どおなるものか | うちはどふして なんのえんりおが いるものかいな アが | さむくツて ならねへ 手なべで一ペへ やらかそふ | しづかにしづかに あすこにみゆるわ たしかにおつて ハイなア | しづかにしづかに あすこにみゆるわ たしかにおつて ハイなア | エ、ままなら くいとふない ほんに いな川のよふだ |
| | あいよ 今おかんが できるよ | ほふが せいじんして めでたいめでたい | ほふが せいじんして めでたいめでたい | ほふが せいじんして めでたいめでたい | さつきから ままができている ここであがるか おくゑするか |
| | もうおたんぜう が まいりますよ | | | | |

ことであったのだと思ひます。

今、わたしたちの回りの子どもたちの世界には、さまで悲しいできごと・事件が続き、心ある大人たちを悲しませています。

子どもの数が少なくなり、子どもたちが必要以上の期待を負わされ、競わされ、管理され、また、過度に甘やかされてのことでしょう。

こんな時、わたしたちは、あのよし藤が子どもたちに對して示した「心配り」を、子どもたちを優しく暖かく見詰め、包み込み、時には厳しく現実を直視させ、回りの人々とのつながりの大切さ、そして、市民としてきちんと暮らしていくことの意義や方法を教えてくれているものを、子育ての原点として再認識していくべきではないかと思うのです。

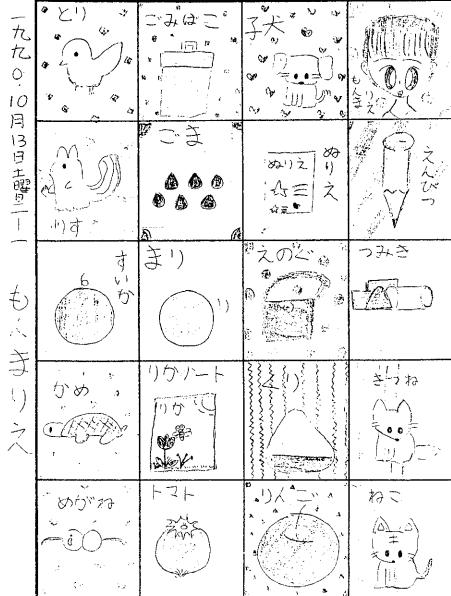
最後に、わたしの目の前の子どもたちが作ってくれた『しんばんづくし』たちをいくつか紹介してこの論を終えたいと思ひます。

(文京区立青柳小学校)

^文献

『よし藤・子ども浮世絵』 中村光夫編著 富士出版
へ出典へ

図版①⑧⑫は著者所蔵



②～⑦、⑨～⑪、⑬～⑮は『よし藤子ども浮世絵』より

しんばんなんごもづくし

| | | | |
|----------------|----------------|-------------|------------|
| | | | |
| ☆ おはうけ | ライオン おはうけ | かいじゅう ねこ | 男の子 うさぎ |
| かわいいもの おはうけ | ねこ | おにぎょう | うさぎ |
| かわいいもの おはうけ | チヨコ ポテトナップス | ペロペロキャンディ | カーチガブ |
| かわいいもの おはうけ | エピソード | けしこ | のり |
| かわいいもの おはうけ | 水 | オレンジスープ | コーラ |

せんはまみ

しんばん友だちづくし



10月13日

スーザン・バーレイ／さく・え

『わすれられないおくりもの』

をめぐって

高原 典子

はじめに

我が家が幼いころ、「読んで」という声に誘われて、よく一緒に絵本を読んだものでした。すると、子どもたちもムシャムシャと片つ端から絵とお話を食べてしまった。それから満足して眠りにつきました。その子どもたちも、今はもう幼児期から遙かに遠ざかり、「読んで」ということはほとんどなくなりましたが、新しい絵本に限つて、読み手は相変わらず私です。というのは、今でも「絵本だけは読んでね。そうじゃないと絵が見られないと」いつて、大きな身体を珍しくそばに寄せてくるからです。すると私も、あの日なたの匂いのするおかげをひざに抱いていたころに、たちまちタイムス



リップし、絵本を読み始めてしまいます。

でもその後、折りにふれたり出し、私一人で見入る絵本もあります。その一冊がスザン・バーレイの『わすれられないおくりもの』です。

「死」との出会い

バーレイの絵は「バディヤー一家」のテレビコマーシャルでお馴染みのものです、それを作るきっかけになつたのがこの絵本だったそうです。確かにドローイングの

ペント、それにふさわしい淡やかで透明感のある色彩。特に空が驚くほど表情をもつていて美しいのです。擬人化された動物たちは各々の動物らしさを十分も失わず、それでいて情感あふれる人間的な生活を営んでいます。また、各場面の絵の構成が、どれも中心部の辺りに円を描く形になっているので、温かな雰囲気が生まれるのでしょう。

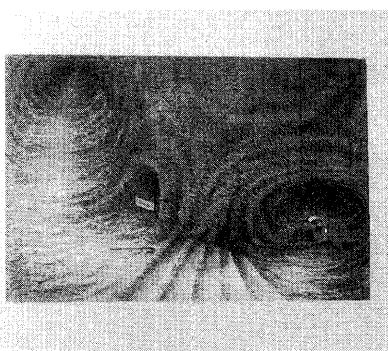
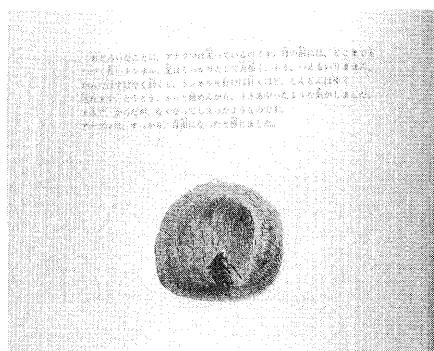
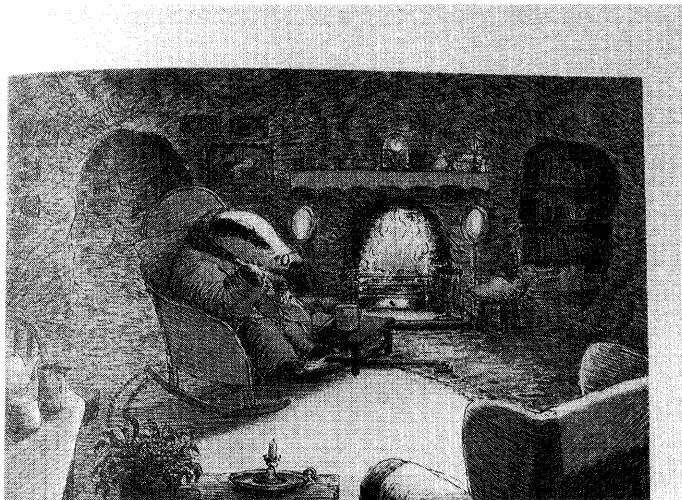
さて、お話の主人公は、困っている友だちにはいつでも助けの手をさしのべる心やさしいアナグマです。彼

は、「たいへん年をとつていて、知らないことはないというぐらいの知り」でした。自分の死期がそう遠くはないということも知っていました。けれども彼は魂の不滅を信じていましたから、自分のことを心配するよりも、あとに残る友だちのことが気がかりで、自分が死んでもあまり悲しまないように、と願っていました。この老賢人の背中のまろやかでなんと魅力的なこと！

ある晩、アナグマは月に「おやすみ」をいって、手紙を一通書いたあと、ゆったりとゆりいすに腰かけます。（図版1）アナグマの部屋の奥には書棚があり、壁には絵がかかり、暖炉の火は赤々と燃えています。その火はアナグマを温もらせるだけでなく、その心の温かさをも象徴しています。ですからこの部屋は読み手を温かく迎え入れ、くつろがせると同時に、アナグマには安らかな死を与えるという両義的な意味を持つているのです。バーレイはその部屋のようすを丹念に描き、生きているアナグマの最後の日常を一瞬のうちに照らし出して見せます。

▲図版1 「わすれられないおくりもの」

(評論社) より



▲図版2 「わすれられないおくりもの」(評論社) より

ゆりいすに揺られているうちに、アナグマは夢を見ます。

目の前に続く長いトンネルを行く夢。（図版2）この

トンネルは、いまでもなく、死という異世界への通路です。今までにも通路を通ってファンタジー世界へ行つた主人公は、たくさんいました。そしてアリスもベンシ一家の四人兄妹も再び現実に戻つてきます。でも生と死の隔てにおいては、伊耶那美の命のように黄泉の国から帰ろうとすることは許されません。そしてアナグマも戻つてはきませんでした。

トンネルを行くうち、彼は「すっかり自由になつたと感じ」、杖一老いてからは体の一部であつた一を置いて、軽やかに走り出します。死は確かに、生から自由になること。とりわけ、日増しに不自由になる肉体から解放されることです。バーレイはこの場面で、彼女の内面で昇華された死生観をみごとに描き出しています。

翌朝、アナグマの異変に気づいた友だちは、すぐには家の家を訪ねます。するとそこには、アナグマの死と、遺書ともいべき手紙がありました。

「長いトンネルの向こうに行くよ。

さようなら アナグマより」

ここから森のみんなの悲しみが始まるのです。日ごろ、アナグマ自身は、「死んで体が無くなつても、心は残る」と信じていました。ですから死を予感しても静かに対処し、手紙を書き残すことができたのかもしれません。でも、周囲のみんなにとって、アナグマの死はやはり突然でした。それまでに、「いつか自分が死んでもあまり悲しまないよう」、といわれたことがあつたとしても、現実に生きているアナグマを目の前にして、どうやつてアナグマ「不在」の感覚を身につけ、準備することができたでしょう。私どもは皆、自分、あるいは愛する人の死に対して、天から与えられる死期を甘受するしかないのです。たとえ医学や栄養学を駆使して、死期をほんの少し先に延ばすことはできても、死がある日、あるとき、天から与えられるものであるという事実を操作することはできません。ですから、どんな死も大なり小なり「突然」なのです。

とりわけ、それが愛する人の場合、死を受け容れるこ

とは至難の技となります。たとえば、おさな子が死神に連れ去られたとき、アンデルセンの「ある母親」は、澄

んだ眼も美しい黒髪も我が子の行方を知るために与えてしまい、盲目、白髪となつて、どこまでも死神を訪ねて行きます。愛妻を亡くした高村光太郎は、もう自分の作品に熱愛のまなざしを注いでくれる人はいない、という空虚感に悩まされ、しばらくは製作意欲さえなくしていました。中勘助は運命の苦楽を共にした義姉を失い、随筆集「蜜蜂」をしたためて亡き人に語りかけます。そんなふうに愛する人の死に出会い、その人への想いを形象化した作品は数多くあります。妹を哀惜する宮沢賢治の作品群しかり、バーレイのこの絵本しかりです。

彼女は来日インタビューで、「絵を描き上げれば上がるほど、亡き祖母への想いを強く感じた。この絵本は祖母のために描き上げた一冊といえるかもしだれない」と語っています。その言葉のとおり、バーレイは、自分自身の想いをモグラーアナグマを最も愛しているーに託し

て亡き祖母に贈りました。

アナグマの遺産

アナグマの死とともに、森にも冬が来ます。雪は地上をすっかりおおいかくしますが、モグラの、そしてみんなの悲しみは、カバーされるどころか、いや増すばかりでした。季節としての冬は、最愛の友の死に打ちひしがれるみんなの心の冬でもあります。しかし、バーレイは、雪の上に二輪の白い花を咲かせて、登場人物たちにも春をもたらします。みんなは、雪どけのくぼ地に集まって、アナグマの思い出を語り合います。そのうちに、それぞれ、アナグマから教わったことがあるのに気づくのです。

たとえば、はさみ使いの名人モグラは、アナグマに、一枚の紙から「手をつないだモグラ」を切り抜く方法をていねいに教わりました。苦心の末、やっとできたときの嬉しさ！ それはモグラにとって今でも「わすれられない思い出」です。カエルは、アナグマに初めてスケー

トを習いました。このときも、アナグマはモグラのときと同様、カエルが上手にすべれるようになるまで、ずっとそばについていてくれたのです。子どものころ、制服のネクタイの結び方を習ったのは、キツネでした。絵の中で、キツネは通学カバンも本も足元に放り出してします。おそらく学校で教科書を習うよりも遙かに熱心にネクタイの結び方を習つたのでしょうか。

こうしてアナグマは、一人ひとりに、別れたあとでも宝ものとなるような知恵や工夫、つまり文化を残してくれました。押しつけではなく、それぞれの個性が伸びるようになると、さりげなく、しかも心をこめて必要なものを与えてくれたのです。彼が与えたのは、すでにでき上がっている「もの」ではありません。創り上げていくプロセスなのです。物質は、ときとして醜い欲望や争奪の対象となります、が、アナグマの遺産は、天にたくわえられた宝ものに等しいでしょう。

この絵本の表紙（図版3）は、たいへん印象的な場面です。長い列の中には、アナグマに会つたことがなくて

▼図版3

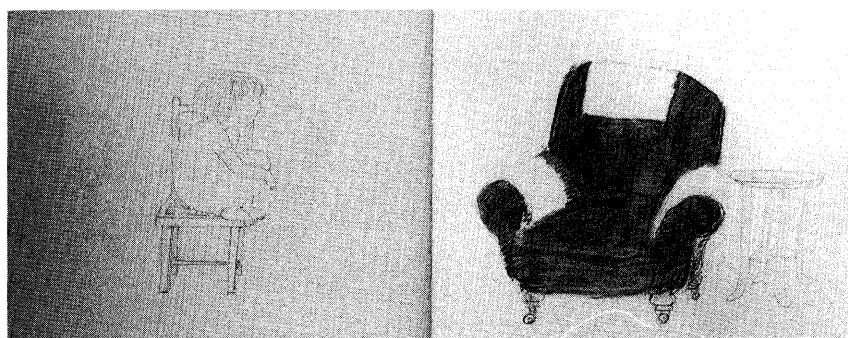
『わすれられないおくりもの』



も、間接的にアナグマから教えを受け、世代を超えて贈りものを受け取ったことになる森の仲間の子孫がいることでしょう。文化を伝え合うことによって、みんなが仲良くなごやかに暮らしていくこととも、アナグマの望みのひとつだったのです。

不在の在

それにしても、人の存在感というものは、その不在において、却ってなんと鮮やかになるものでしょうか。バーニンガムの『おじいちゃん』では、おじいちゃんは孫娘を「よくきたね げんきかい?」といつも喜んで迎え、友だちのように遊んでくれる人です。けれど、おじいちゃんが亡くなつたあと、からっぽの茶の間で、それから例は少し違いますが、子どもが幼いころ、バーッと外に遊びに出ていつてしまつたあの静寂の中での存在感を妙に強く感じたものでした。それは「不在の在」



▲図版4 『おじいちゃん』(ほるぷ出版) より

というもの。つまり、かけがえのない存在であることを再認識するということでしょう。幼い子どもがひとりで留守番することをいやがるもの、母親や家族の不在によって、いつもよりその存在を強く感じ、孤独の不安が倍加されるせいもあるかもしれません。

でも家族が帰ってきたとき、その不在感は今までよりずっと大きくて新鮮な存在感になつて満たされるのです。しかし、天に召された人の不在は、その人が生きていたときの存在感を頼りに埋めるしかありません。つまりその人がどう生きたか、その人とどんな体験を共有したかということにかかるのです。

アナグマの不在感は、生前のアナグマの心にくい贈りものによつて満たされました。その贈りものを捜しあてたのは、まぎれもなくみんなのアナグマへの熱い想いだったのです。

アナグマの老いは理想とも思えるもの。どうしたらそんな老境が迎えられるのか、アナグマに尋ねたのですが、まだ答はもらつていません。でもページを繰れば、

いつでも、木の切株に腰かけて、生きているアナグマと語らうことができるのです。それは絵本ならではのうれしさです。

『わすれられないおくりもの』スーザン・バーレイさく

・小川仁央／訳 評論社

『おじいちゃん』ジョン・バーニンガムさく・谷川俊太郎／訳 ほるぷ出版

(小田原女子短期大学講師)



*** ある日の育児日記から ***

和代 佐藤

子どもを生んで間もない友人から、手紙がきました。

圭、大きくなつたね。
みじみ思いました。

『子育てって大変ね。何といつても、四六時中
子どもに束縛されているのが一番つらい。(中
略) 喫茶店行つたり、本を読んだりしたいよ』

圭は私の足もとに
座つて、じゃがいもを
転がして遊んでいま

(2)

そうそう、私も同じでした。とにかく自分の時間
というものが消えてなくなる。ゆっくりトイレも
行けないです。『束縛って、束ねて縛られちゃ
うのよ、キャー』なんて書きたくなる気持ち、わ
かるわかる。

でも、この手紙を読んだあと台所へ立つて、し
す。以前は、料理するとなれば、泣いてまとわり
つくのを振り払いながらだつたり、おんぶしなが
らだつたり。それが今は、泣かずにひとり遊びし
ているのです。人が見れば何てことない光景で
しょうが、(どちらかといえば台所を汚すいたず
らっ子かな?) 私にとつては、トンネルをひとつ
通り抜けたような解放感。思わず「いい子ね」
と頭をなでて、圭にげげんな顔をされてしまいま
した。



プラハの冬のくらし

大 梶 優 子



朝やけの美しさにみとれて、最後の戸締り確認の緊張感から解放される一瞬がある。出勤、登校を急ぐ家人達が、順次街灯に照らされた歩道をバス停に向かつた後のことである。時計は、七時をまわつている。ヴェランダの先に広がる緩やかな丘陵地帯と、空全体を覆う黒灰色の厚雲が一体となり、そのわずかに切れた細長いいくつかの層に、太陽の燃える証を見る。その色のコントラストは、朝のすがすがしさよりも、別世界をのぞき見した不気味さを感じさせるのだが、やはり美しい。暗闇の中

には急速に闇の世界に入つていくという毎日である。雲の向こうに、太陽の姿を見る日はもつと稀で、そんな時は、尊厳な感情が自然に湧いてくる。街灯の消えた灰色の町でながめる灰色の空、その空に浮かぶくすんだ赤色の玉を初めて見る人が、「あれは、なに?」と聞いたのを思い出す。

一言で言えば、プラハの冬は、暗い。

ここでも、一年の間には四季があり、暦の上での区分

は、日本と同様に春分・夏至・秋分・冬至でされている。にもかかわらず、くらしの上での区分とは、ずい分離している。春・夏・秋の季節を早足で過ぎし、冬をゆっくり味わいつづくらす感がある。十一月頃、寒気団から送られる強風で始まり、四月の冷たい雨降りまで続くのが一般的である。一年の半分は、冬のくらしになっている。

プラハの冬は、長いのである。

この暗くて長い冬は、当然寒さを伴う。緯度が高く、また内陸の地で感じる寒さは、鋭く、厳しい。「寒さ」は、一瞬にして、「痛さ」に変わるというのが実感である。もつとも、日本の北陸地方や北海道には、的を得た美しい別の表現があるのかもしれない。凍てつくような寒さを毎年経験しながら、私は単純に「痛い」と感じてしまうのだが。

冬のくらしの基本は、まず防寒である。

道行く人々の服装に共通なのは、帽子、厚いコート、手袋、厚底のブーツである。もう少し注意深く観察すれば、

毛糸の帽子は二重編み、コートは表地と裏地の間に芯入り、手袋は裏毛付き、ブーツも裏毛張りであることに気付くはずである。また、多くの人々が毛皮、特に羊毛皮を裏にして、表がスウェード、内が毛になった状態の毛皮を材料にした防寒具を身に付けているが、これは伝統性、経済性に基づく選択であって、動物虐待の見地から抗議される対象にはならないだろう。ちなみに、夫のコートは、二十五年間、私のものは十五年間着用し続けている代物である。成長の速い子ども達のための冬仕度は、親の一大行事である。九月の終わりには計画を立て、十月中には準備する必要がある。クリスマスプレゼントでは遅すぎる。乳母車の乳児は、コートの代わりに毛皮袋に入ることになる。これだけ整えてしまえば、外での活動が自由になる。モードやおしゃれは、次の段階の関心事である。東京周辺の冬の装いは、プラハでの秋の装いと考えればわかりやすい。外気がコートの織り目を通つて骨身にしみる経験をした時、初めて「寒さ」に対して謙虚になるようである。私のそれが、プラハに

着いた年の十月十五日であったことは、今でも忘れられない。もっとも、実生活でのこれに類する失敗は、限りなくくり返された。特に公園や町中で、多くの母親達や保育者達が、小さな子ども達の帽子や手袋を忍耐強く、かぶせなおし、はめ直しているのを見る時、自然の厳しさに対して甘さの残る私自身の反省につながる。ここでの防寒は、単に寒さを防ぐことではなく、生命を守ることと直結している。だから、「寒さに耐えよ」とは、誰も言わない。寒さを感じないように装う配慮をすることが先決なのである。

住まいの防寒は、その構造にもみられる。地下室、屋根裏部屋、二重窓、玄関先の軒下ホールが「間」をつくり、住まいの空間が直接外気に触れないようになっている。また、伝統的な家は、窓が小さく、暖房の経済性を考慮して、立方体の形をしている。住まいをいかに暖かく保つかが、「住」の基本条件である。室内暖房ではなく、家全体を暖める中央暖房の方法を採っている場合が多い。暖房期間は、半年よりも長い。国公立の建物は、

暖房期間が定められているが、それによれば、十月一日から翌年の四月末日までの七ヵ月である。暖房センターを自主管理しているところでは、必要に応じて期間を変えており、開始時期を早め、終了時期を延期する場合が多いようである。また、個人住宅では、自動調節で室温を一定にしていると、夏でも暖房装置が機能するという。それだけ、住まいに暖房が欠かせないわけである。外の寒さを遮断し、部屋を暖めて、人々は快適に過ごす。家中では、装いに季節感がない。私達は、公団のアパートに住んでいて、冬を半そで姿で過ごし、夏のあら時、セーターやズボン、厚靴下という奇妙な装いになることがある。寒さから身を守るのは、冬ばかりではない。

厳しい寒さの中での食料源は乏しい。伝統的な冬の食事は、夏に作っておいた果物や野外の保存食を中心にしてものである。食生活が改善されて、生の野菜や果物を多く摂るようになってきたが、大都市周辺の温室栽培物の他は、多くを輸入にたよっている。冬の間土壤は、地

下二メートル位まで凍るからだ。それで、栽培は不可能だが、細菌撲滅に役立つていう話を聞いた。エネルギー補充のための油、甘味を多く含む食品や調理法の問題も指摘されている。日本人である私は、他人事のように考えていたが、知らぬ間に渦中があり、つまりは年間を通しての食改善の注意を受けた。

冬の暮らしの衣食住が整うと、身の回りに活氣あふれるプログラムが豊富に見えてくる。

寒いから室内で過ごすと考へる人はいない。戸外の空気に触れるのが、健康法の基本である。「どんな日にも、雨、風、雪にかかわらず、午前二時間、午後二時間の散歩を欠かしませんでした。」と老婦人が言う。自分一人の散歩でない。孫との散歩である。乳児の時は、毛皮袋に入れて乳母車に乗せ、歩くようになれば歩かせて、戸外に出す。マイナス二〇度の日も、鼻から下にガーゼをかけたり、マフラーで覆つたりして、直接外気に当たらないよう気をつける。然し室内に入れておくといふようなことはしない。私は、雪の積もった凍つた道

がこわくて、娘の眠る乳母車をバルコニーに出し、ヨチヨチ歩きの息子を連れて外に出たこともあつたのだが、そんな時、この老婦人の自信に満ちた声が耳に聞こえて、身のすぐむ思いをしたものである。二人の子供達が、自分の足で歩き始め、外に出たがるようになってからは、本当に毎日風雨に負けず、森を歩きまわり、そして遊びに夢中になつた。幼稚園の子ども達も、年間通して外の散歩が日課になつてている。

外の空気を吸う、散歩をするだけでなく、もつと自由に身体を動かし、冬のスポーツを楽しむようになれば、暗くて寒くて長い冬も苦にならない。そり、スキー、スケート、アイスホッケー、にどれも身近にできるスポーツである。

私の住むアパートの前は、学校の運動場で、そのアスファルトにした部分は、冬の間、凍る期間、スケート場になる。学校の用務員さんは、夜十時頃になるとそこにホースで氷をまき、スケートリンクをつくる。体育の時間は、スケート、アイスホッケーになるし、放課後は、

自由に滑る子達で、一杯になる。暗くなると、脇の体育馆の壁に取り付けられた夜間照明が付いて、今度は勉強を終えた大きな子達がアイスホッケーに興じることになる。感心なのは、必ず数人の大人がいて見ていることである。我が子の指導が主目的かも知れないが、全体を見ることにもなり、時々注意の鋭い声が飛んでくる。

土、日ともなれば私の住む丘の下の大きな池には、アイスホッケー場がいくつもできるし、ゴトゴトした自然の氷の上を巧みに滑る子供達や親達も多い。人数のそろわない家族アイスホッケーで、私も得点を入れた経験者になつた。

町中には、「冬のスタジアム」がいくつかあり、アイスホッケー場が解放されて自由に滑るようになつていて、私は仲間入りできない。巧みな身のこなしと超スピードであふれ、私には単に無秩序に見えて、恐ろしい。どの人も、魔法びん、軽食持参で楽しんでいる。こそこそ、スポーツをする所であつて、娯楽施設ではないのである。靴は持参、入場料を払ってロッカーの鍵をもら

うだけである。売店もなければ、サービスもない。時間を惜しんで、ひたすら滑り楽しむだけである。

雪が降れば、スキー。プラハ周辺の公園、丘陵地帯は、ノルディック・スキーをする人達で一杯になる。夏の間、自転車乗りを楽しんだコースは、そのまま冬には、スキーの遠足コースになるという具合である。その中の斜面が、小さな子ども達のそり遊びやスキー練習場になるのは勿論である。

プラハの子ども達の冬休みは、日本の子ども達と同様、クリスマスから新年にかけての二週間である。春休みは、二月末一週間か三月初めの一週間である。プラハ一区、五区、六区、十区とで、二つの期間を毎年交代で分け合う。冬の間の「春休み」というのも奇妙だが、雪のたっぷりある間のリクレーションという意図も察せられる。年休を取つた両親と山ごもり、あるいはスキーキャンプ参加を楽しむケースが多い。

冬の間の文化的なプログラムも多彩である。毎日に変わる演奏会場や劇場の出し物の横で、ダンスパー

ティー、カーニバルの企画が豊富である。私個人は、子ども達との生活が中心で、大人のそうした社交の場に出たことはないのだが、毎年の楽しみにしている人々も多い。子ども達のカーニバルもさかんである。それぞれ趣向をこらした仮装で、にぎやかに楽しむ。クラスで勢揃いした写真を見る時、ファンタジーの世界の満足気な主人公達の背後に、そのアイデアと技術を読み取ろうとする意識が今でもふと働いてしまうのは、子ども達のイメージを具現するのに悩む経験をしたせいだろう。

暗くて寒く、長いプラハの冬を、人々は積極的に明る

く楽しく暮らす。その知恵とエネルギーには、感心してしまう。厳しい自然条件に頭を下げる忍耐強さばかりではない。それにもかかわらず、人々に共通している願いは、春の到来を待つこと、太陽の輝きの中に身を置くことである。太陽が雲の切れ間に現れると、人々は足をとめ、コートのボタンをはずす。それから顔を太陽に向けて目をつぶったまま、じっと佇んでいる。こうした光景もまた、プラハの冬の暮らしの一つである。

(プラハ在住)

言語障害の臨床研究ノート(6)

終章

国際化のうねりの中で

村上 敏子

I 個として

先日出席した会合で、星野富弘さんの詩が美しい英語で朗読され、星野さんの原作を日本語で読んだ時と同様に心を揺り動かされた。星野さんの詩や散文は、いつも私の心に小さな震源のような感動を呼び起こす。

実は、私も星野さんの詩や散文を朗読することがある。しかしそれは、教材としてであり、患者さんと共にである。

私のところでは、病気や事故による脳の損傷のために言語障害をおこしたおとなの方々も言語の再学習に励まっている。高齢化社会を反映してか、最近では、言語発達の途上で問題になる言語障害を持つ子ども達よりも、言語機能がいったん完成した後に言語障害をおこした60～80歳台の方々にお会いする方が多くなってきている。

言語の再学習は、幼児期の言語発達の道筋に沿って行うので、言語障害が重度な場合は語彙を増やしたり、文構成力をつけたりする指導が中心になるが、言語能力が

比較的良く保存されている患者さんの場合には、ことばを楽しんでもらおうと思い、星野富弘さんや谷川俊太郎さんの作品を朗読したり、安野光雅さんの絵本に文章をつけて世界で唯一の作品を作ったりしている。また、病院の所在地である福岡県久留米市に住んでいる人が多いので、福岡県や久留米市から発行される公報誌も私にとっては、教材という宝の山である。

「このような使い方もできる」と、はつと気づくことも時々ある。同じ教材でも、私の狙いに合わせて異なる使い方ができる。おとなな患者さんは、性別・年齢・教育歴・生活歴・家庭環境が複雑に絡み合った個人史とそれに裏打ちされた言語世界を本来持っていたはずである。更に、言語障害の状態も、脳の損傷部位や広がりによって、一人一人異なっているので、教材は一人一人について考えなければならないし、同じ教材を使うにしても達成目標は微妙に異なる。

コミュニケーション能力を高めるために応用編としてグループでゲームをしたりする指導もあるが、基本的に

は言語治療は一対一で行うものである。

もちろん、言語障害をタイプによつて分類することはできるし、指導法の類似性はある。しかし、目標の設定と教材の選定は、「Aさん」という具体的な一人の人物を思い描きつつ行われるべきものである。

このように考えると、一人一人の人間のありようを良くとらえる能力が、言語治療の臨床に関わる者に必須の資質ではないか、とさえ思えてくる。感受性の強い人が経験を重ねていけば、間違いなく優れた臨床家になるであろう。

言語障害の臨床は、一人の人間としての生活史を背負つた人と向き合うことなので、私には重たく、かなりの気力を必要とする。そこで私は、体力と気力を充実させるためにおそらく稀な程に規則正しい生活をしているのではないかと思う。十分に睡眠をとり、爽やかな気分で、かつ、気力を充実させていて、初めて、患者さんが、そこから何か得て帰るものがあるような臨床場面を作り出すことができるよう思う。

かなりの緊張を強いる仕事であることが、一方で私の家庭での仕事を充実させている。味噌やママレード等の保存食を作つたり、草むしりや野菜の種まき等の庭仕事をするという気分転換が、各自一つのまとまった仕事をして完成させていく。通勤の途中、バス停までの道程で空き缶を拾うことも、狩猟本能が満足させられるのか楽しんでやっている。

このような日常生活での喜びがなければ、私には、臨床場面は到底支えきれないだろう。

このように、言語障害の臨床とは、深く個々人に関わる仕事であるので、国際化のうねりの影響を受けない所に深く沈んだもののようにも思えるが、実は国際化と個の問題とは、深く関わりがあることに、私は最近気づいた。

II 多様性の中

車椅子で移動されるある若い男性が、「障害者も海外へ施設見学等に行くだけでなく、気軽に遊びに行こ

う。」と呼びかけており、本人も既に何度も海外旅行をした経験があることがM新聞に紹介されていた。

好ましくないと、いうニュアンスの込められた「海外旅行ブーム」という言い方をする人もいるが、私は、特にこのような記事を読んだ後は、可能であれば、誰でもがどこへでもどんどん出掛け行って、気候の違い、はえている植物の違い、飛んでいる小鳥の種類の違い、生活の違いに直接出くわすことには深い意義があると思う。もちろん、旅行から帰つて来た若い人が、買い物に終始し、余り見たり考えたりして来なかつた様子である時には、いささかげんなりした気持ちになることは否定できない。

「おみやげ」という商品の背後には、製造した人、販売した人など、さまざま人が見えるはずである。外国の珍しい産物を前にして、そのものの由来や、関わった人達の生活に思いを馳せることなく、物だけを買うとしたら、おみやげとはとても貧しく寂しいものではないか。

しかし、どのような人であつても、何も感じずに帰つて来たはずはないと私は期待したい。「世の中にはいろんな事があるものだ」と感じることがあつたのであれば、それで十分に旅行の収穫はあつたと言えよう。

人が他の人を受け入れられない時、「自分とは違う」ということが理由になつていることが多いよう思う。同じタイプの女性でいつも一緒に行動し、他を入れないということが実際にあるようだが、このような行動は、女性が個として自立することを妨げているようで残念に思う。何かにつけて「同じなのだ」と確認し合う安心感で結びついているために、表情や話し方まで似るのは不気味な程であるが、いったん異なつた境遇に立つと、ほとんどつき合わなくなるものらしい。

だが、自分とは違つたものに出会い、時には格闘し、互いに折り合つていくために、あるいは納得するものがあって、自分をえていくことこそ「成長」というのではなかろうか。この種の成長ならば、私のような40歳台の者にも許されていることであり、生きる上で最も輝か

しい喜びのように思う。

「カルチャー・ショック」とは、最近、よく見たり聞いたりするようになったことばであるが、自分が慣れ親しんできた文化とは異なった文化に出会うことによつて、あたり前のこととして享受して来たものの有難さを確認することもあるうし、異なったありようを是認し、うまくつきあっていくすべも身についていくのではないだろうか。

異なるものを良く認識することは、自分の置かれた位置、ありようを客観視する作業でもある。

このように考へると、異文化体験を余儀なくする国際化とは、実は外へ向かうだけでなく、個へと深く内に向かうことを同時に意味する。

文部省の招きで、オーストラリアから日本に來たばかりの男性が、「日本で生活するようになつて、驚くことは、一歩家の外に出ると日本人ばかりであるということだ。自分の国ではいつも周囲にいろんな人がいる」と言つていた。もちろん、日本にもアイヌ民族の文化も琉

球文化もあるのだが、移民が盛んに行われた国と比較すると、单一民族・單一言語・單一文化の国に見えるのであろう。

また、日本人自身、「日本は單一文化の国だ」と語る人も多い。單一文化の国という意識が強い中では、「同じである」ということが至上のことであり、安心なことであるだろう。「異なつてゐる」ことは、はみ出していふことを意味する。

そこで、ものとの善惡を判断する力よりも、一緒に足並みを揃えることの方が重んじられることになりがち



である。人と話を合わせることにぎゅうぎゅうとしている人を見るのは愉快なことではないが、あながち個人のせいではないのである。

しかし、多様な文化の共存する社会では、自分が今話している相手とは異なっている点があることに気づいても、「單一」を至上とする社会にいる場合よりは比較的平氣でいられるのではないだろうか。

会合の席で、カナダ人女性、オーストラリア人男性からそれぞれの国で multi-culturism が政策としてとらえていることを聞いた。もちろん両国では、現在も移民が盛んに行われているという事情によるものであろうし、先住民族の問題は必ずしもうまく行っていないといふことわりつきではあつたが、国際化と固有の文化の尊重という政策には、個々の人間の存在を肯定する優しさがあるよう感じた。

やはりこれも、オーストラリアから来日して、一年間滞在した女性から聞いた話である。彼女は「日豪新聞」という日本語新聞をオーストラリアで創刊した日本人男

性を夫とする小学校教師であった。

彼女の話によると、オーストラリアでは、政策によって一切の差別が禁じられているので、彼女のクラスには盲の子どもも、補聴器をつけた子どもも、車椅子の子どももいる。しかし、政府は助手を雇うお金はくれないので、慣れる迄の最初の三ヵ月間は大変だったという。

当時の私は日本で余り報道されていない国の政策や経済事情を全くと言ってよい程知らなかつたが、ある程度の手助けがあれば、いろんな子どもが、同じ学級で学べる可能性が広がることを知つた。

オーストラリアの小学校教師の話を聞いたちょうどその頃、福岡県では一人の盲の中学生が県立普通高校進学を希望し、点字で受験させて欲しいと願い出たが、通常の試験が行われたので合格せず、茨城県にある筑波大学付属盲学校に入学する、ということが起こつていた。

私はそのことは新聞の記事を通して知つてゐるのみであつたが、普通高校入学後に備えて点字奉仕をするボランティアも確保してからの申し出であつたので、点字で

の試験を受けて合格した場合には、普通高校の授業についていけただろうにと、彼がチャンスを与えるられなかつたことを残念に思つた。

当然、オーストラリアの小学校の話からその出来事へと話が広がつた。私は、そのことについては未だ他の人の意見を聞く機会がなかつたので、どのような意見が出されるか興味津々であつた。しかし、聞かれたのは「ハンドディキャップを持つ子どもを普通学級に入れることは

本人のためにも良くない」「子どもが望んでいるわけではなく、親がそうさせたいのだ」という意見であつた。

クラブ活動で化学の実験をしていて失明した高校生がいた。新聞でその記事を読んだ数年後、私は職場でその青年と頻繁に会うことになつた。彼は、私の同僚の許で歩行訓練を受け、点字を学んでいた。そして数年後、彼は在学中の志望校は京都大学であったのを地元の九州大学に変更し、合格したのである。

私は、彼の合格を報じる新聞を前に歓喜に包まれていった。彼を祝福し、点字奉仕の人々に感謝したいと思つた。

た。

彼の例は、ボランティアを確保すればハンディキャップを持つ人々の可能性が広がっていく確かな証である。

異なる者を受け入れることに緊張し拒絶する前に、ボランティアを募る、更には育てることから始めたら、心の持ちようも学校のありようも随分と変わらうに思う。

III 終章

この一年間、私の仕事の都合で隔月であつたが、「言語障害の臨床研究ノート」を書かせて戴いた。

連載が進むにつれて、学会発表では決して表に出ることのない私的な思いの部分を多く書いたかと思う。

この連載で書いてきたことは毎回異なつてゐるようには見えても、私が読んで下さる方に伝えたかったことは、実は、唯ひとつのことではなかつたのかと自分で省みて考える。

それは、自分とは異なる存在を許し受け入れること

が、コミュニケーションの原点ではないかということである。自分と異なったものに心を開いて向き合って初めて、自分自身も育つのではないかということである。

しかし、これは気持ちの持ち方を変えるという心情的なレベルにとどまることではなく、具体的な方法に助けられるとずっと行きやすくなることだと思う。

たとえば、点字や手話等を取得する人が増えて、ハンド・ディ・キャップを持つ人々と健常者との接点を増やしていくば、お互いのコミュニケーションはずっととり易くなるだろう。ハンド・ディ・キャップを持つ人々もそのような特徴・個性を持つ人という風に見なされ、福祉センター等の特定の場所でのみ出会う人ではなく、日常生活の中での私達が頻繁に出会う近しい存在になるのではないか。

手助けをする方法を知らないために、ハンド・ディ・キャ

ップを持つ人に接することが苦痛だということは、心優しい人ほど強く感じるのかもしれない。手助けをする技術を持つことや、コミュニケーションの方法を見つける身につけることは、不必要的不安を取り除いてくれる。

テレビ番組の「セサミ・ストリート」には、指揮者の小澤征爾や歌手のボール・エイモン、女優のキャスリン・マーティナー等も登場して、教育番組に対する一般の人々の理解と協力が伺えて嬉しい。この春に私がこの番組を見始めてから、手話を使う聾の女性が既に三回登場した。

二回目の登場では、妊娠した友人がドッپラーを通して聞こえる胎児の心音のリズムに合わせて指で拍子をとり、聾の女性にも胎児の様子を伝え、喜びを分かち合っていた。ハンド・ディ・キャップを持つ人との接点を見出すことを、きわめてあたり前のこととして扱う制作者の見識に頭が下がった。

三回目は、その女性は図書館の司書として仕事をしていた。

日本では、聾啞者の職業は一般的に言つてある範囲に限られがちである。しかし、文字による言語学習がきちんとなされている場合には、内言語は高い水準にまで発達しており、深く思考する力も獲得されているはずであ

るから、今後職業選択の範囲はもっと広げられて当然なのだ。

言語障害の臨床と研究に携わる者の存在意義は、セサミ・ストリートが具体的に示してくれたように、言語障害を持つ人々がより良い日常生活を送れるように、心情のレベルのみにとどまらず、方法論のレベルで手助けをする」とある。

言語の二大機能は思考の媒介である」といふ、ローラン

ケーショーン手段であることなので、言語機能を高めて思考力をつけ、言語障害が完全に治る種類のものであれば治し、完全には治らない場合には可能なコミュニケーション手段を見つけ出して、周囲の人々と折り合って生きていくための助力をすることだが、言語障害の臨床家の中心的役割であろう。もちろん、共通のコミュニケーション手段を求めて周囲の人々が歩み寄っていくようにな、その方法を助言するのも言語障害の臨床家の果たすべき役割の重要な部分である。

言語障害の臨床と研究に携わる専門家のことを米国で

は、Speech and language pathologist と書いており、博士号を取得していることが一般化しているようであるが、その資格の認定は学会で行っている。国家資格にこだわると言語障害を持つ人々のニーズに応じる十分な質のものにする」ことが困難なために学会認定になつたと聞く。日本では臨床心理士について同様の認定法がスタートした。言語障害の臨床家についてもかくあらねばならぬと思う。

言語という高次の精神活動に関わる仕事を自分でも大切にしつつ、この仕事が社会的にも尊重されることを望む。

自分の仕事について書くことは、初心に帰ることを意味する、と、このシリーズを執筆しつゝ再認識した。書くチャンスを与えて下さった恩師の本田和子先生に心から感謝を捧げる。

(聖マリア病院言語治療科)

心が育つということ　その(5)

幼児の持つ「内一外」意識の変容をめぐって

豊田　一秀

(4) 社会的なコントロール

(A) 大人(教師)と子どもが相互に持つコントロール感

—大人と子どもが折り合うという事をめぐつて—

モノに対するコントロール感に比べて、人間に対するコントロール感を、子どもは持ちにくいということについて、私は前節より述べている。子どもにとって、特に、親や教師は様々な特権を持った特別な存在である。事実、この両者は、しつけ、教育の名の下に、子どもをコントロールしようとする。しかも、それらのコントロールは、「親心」「善意」という衣をまとい、親や教師

自身にも意識されていないことが多いので、それだけ根は深いと言わなければならない。

一例として、一般に、しかるよりほめることを教育のポイントとして重視する意見は多い。しかしこれも、少し穿った見方をするならば、子どもをコントロールするには、かかるよりもほめる方が効果的であると語つていいにすぎない、と見ることも可能であろう。ほめることがテクニックに堕してしまふと、すぐにこの問題に突き当たってしまう。親や教師に認められ、ほめられたいと思う子どもの気持ちは強い。しかし、その気持ちを利用

しようどばかりすると、いつか子どもは、自分が大人にコントロールされているだけで、本当の自分の心はそこにないことに気付き、大人を憎み、自分を嫌悪するであろう。大人が反抗期と呼ぶような時期は、子どもが、それまでの自分と外界の関係を修正しようとしている時のサインであると見ることもできよう。

このように、コントロール感というものを少し遠くから見てみると、人間は誰でもコントロールすることを望むものの、コントロールされることは望んでいないといふ事実に私たちは気付かされる。子どもも、大人と同じように、他者（大人を含めて）をコントロールしたいと望む存在なのだ。

子どもと日々接している親や教師は、この点について強く心しておかなければならぬと私は思う。答えは簡単ではない。子どもに、親や教師に対するコントロール感を持たせるということは、親や教師が、子どもの言いなりになることを意味する訳ではけつしてない。しかし子どもの行動、言動を大人の価値基準で判断する以前

に、それを事実としてそのまま受け、その子の、その時的心持ちをわかるうとする配慮は、子どもにコントロール感を持たせるに当たって不可欠であろう。なぜなら、このような配慮の中から、次に子どもに応えようとする姿勢が生まれてくるからである。

家庭や保育の場において、どんなに教育的な内容を子どもに与えようとしても、当のその子どもに即していなければ、本人にとつては、ひどく迷惑なことであろう。しかし、逆に常に子どもの望むことのみに応えているのが最良の方法かと言えば、それもまた一面的に過ぎる。今、ここにいる、この子どもの現在と未来にとって、何が最も必要なものかという問い合わせに対する答えは、親や教師のみが知っているわけではないし、また子どものみが知っているわけでもない。その答えは、大人と子どもが縦糸、横糸となつて織り込んで行く一枚の織物に例えられるであろう。そして、この答えを求め、模索していく過程こそが、お互いが、お互いに対しコントロー

(B) 子どもの、親へのコントロール感

自分の子どもを育てる中で、私共親が、子どもに気付かされることは多い。

長男Aは、四歳一ヶ月から約一年半の間、依頼心が強くなり、時にひどい夜泣きをするといった、不安定な時期が続いた。原因はいろいろな要素が絡み合っていて、簡単には求められないと思う。ここでは「子どもの親へのコントロール感」という題にそつて、Aの苦悩を、親へのコントロール感の取得と、親からの被コントロール感の修正という面から、兄弟関係をも含めた中で考察を進めていきたい。

△事例3—3△

う！」と語氣を荒くすると、「大きくならなければよかつた……」と言つて泣き出す。
(家庭にて)

目覚めから着替えまでの一光景である。Aは、いろいろと親に依頼をしているが、親は、完全にAの依頼に応えている訳ではない。それに對して、同じことを繰り返して言うAの中に、非理性的に(気持ちが壊れてしまつて)いる)なつていてAを私は見る。本人も、その訴えの内容そのものよりも、その言い方を通して、自分のどう

しようもないイライラした気持ちを表明しているであろう。このことは、Aが夜泣きをする時に、「おなかが痛いー！ 目がかゆいー！ 足があついー！」などと繰り返し言い続けるのと同じであると思う。(これらは、どちらも身体的な不快感であつて、Aは自分の心の状態を、体に置き換えて表明している。)

成長、発達と共に、いろいろなことが出来るようになることは、親の喜びでもあるが、それ以前に、何よりも子ども本人の喜びであることが、その本来の姿であるはずである。しかし、Aはこゝでは、出来るようになつた

自分に、喜びよりもむしろ痛みを感じ、出来ない時の幼い自分に気持ちを向けていた。このAの心の動きは、この時期、この事例にあるような事以外にも、形を変えて表明されたが、いずれも△△が出来ない自分△を志向するものであった。(3)マージナルな空間 降園の時、目覚めの時を参照 一九九〇年6月号)

この時期、Aが事ごとにあたって、本当は自分で出来ることを、親にやつてもらおうとしたのには、様々な意味があつたことと思う。第一には、自分の意志で、今△へ出来るようになった自分△があるのでない、という自己主張があつたのである。私たち両親は、Aの気持ちを大切に育てて來たつもりであったが、それでもAにしてみれば、自分が常に課題を与えられ、それをクリヤーすることで親に評価される存在であると、自分自身を見るようになっていたのではないだろうか。すなわち、親にコントロールされている自分を感じ、逆に、親に応えてもらっている感じ——親に対するコントロール感——を持てなくなっていたのではないだろうか。第二

には、生まれて初めて集団生活を体験したAが、保育園を本当に楽しめないままに、保育園で自分を主張しきれない分だけ家庭において自己主張が強くなつたのである。第三には、弟のBと自分を比較して、Bをうらやむ気持ちが、Aの中に強く働いていたと思う。二歳のB



は、着替えも親にしてもらっているし、食事の助けも受けている。しかも、保育園に行かずに一日、親と遊んでいられる。大きくなりたくないAにとって、正に弟のBこそ、そうでありたい自分の姿に思えたのではなかつたのではないか。換言すれば、いろいろなことが出来るようについて事に、価値を持てなくなっているAにとっては、唯、いろいろなことを、自分でしなくてはならなくなつた事としてのみ、自分の成長を認識し、弟へのうらやみの気持ちを強めていたのだと思う。

自分で出来ることを自分でするのは、当然であるとして、私たちはAに求めてきた。しかし、Aにしてみれば、それは常に親の要求に応えることしかなかつたのである。それ故に、「本当は、やれる自分なのだから（動作として）、自分ですることばかりを要求し続けないでほしい」という主張を、Aはしたかったのではないのか。

このようなAをして、親はそれまでAに求めていた「当たり前感」を修正せざるを得なくなつた。具体的

には、以下の四点について考えてみた。
(1)○○が出来てAを、当然とは思わず、内面では、Aなりに努力していることをよく理解しておく。
(2)依存心が強くなっている時には、ひとまずは、その気持ちを受け入れてみる。
(3)今までも、そうしてきたりではあるが、他の子どもや、平均と比較しない。
(4)親がイライラさせられた時には、親がイライラすることのみで、親の気持ちをAに表明するのではなくに、そのいら立ちを、言葉に置き換えて伝えるように努める。

このようだ、親側からの調整の中で、Aは少しづつ、親が自分の気持ちに応えてくれているという意識、すなわち、親へのコントロール感を回復し始めた。Aの心の中には、自分が大きくなつて、何でも一人で出来るような自分になりたいという気持ちと、逆に、小さい時に戻つて、何でも親にしてもらいたいと願う、相反する二つの気持ちがあるようだ。私たち親は、これまで、大きくなりたいと志向するAの気持ちに対しても、Aの実力（Aが自分でそう志向する気持ち）以上のものを

要求していたのではなかつただろうか。そして、Aもその気持ちに応えようとして、心中に無理が生じたのだと思う。その結果として、Aは心のバランスを保つべく、丁度その逆である、△何も出来なくてよかつた、

小さい時の世界△へと、その気持ちを向かわせたのではないか。しかし、Aが自分の気持ちを向かわせたこの世界も、実際には、Aの実力以下の世界であつて、Aに合つた世界ではないことに、Aは気付き始めるのである。

例えて述べるなら、Aの心のなかで、この時期、大きくなりたい気持ちと、小さくなりたい気持ちの間を揺れる振り子の振幅が大きかつたと言えるであろう。この振り子の振幅の中心に、Aの眞の姿があると考えれば、Aが親に対するコントロール感を取り戻し始めたことは、この振り子の振幅が小さくなってきたことであると言つてもよいであろう。

Aは、自分に対する幼児なりの正しい認識を持ち始めている。その認識とは、AはAの実力以上の存在ではな

いし、そうかと言つて、実力以下の存在でもないという認識である。

このことは、以下の二つの事例の中で見られるようだ、小さなAの行動の中にも見ることが出来る。

△事例3—4△

夕食の時、大人用の少し大きめのハシを母親が用意して、Aは、初めは少し嬉しそうにしていたものの、すぐに、こんなハシは大きすぎる、自分はまだ小さいのだと言つて、母親にハシを突き返してしまう。そのような事があつた一か月後、夕食前のひと時、AはBのめんどうをよく見て、一緒に楽しく遊ぶ。楽しい気持ちで食卓に付くと、以前に大きすぎると言つて怒ったハシを、自分から出して来て、使ってみようかなと、独り言を言いながら使い始める。

(家庭にて)

この事例において、親から直接言われたときには、Aは強く課題意識を感じてしまつて、自分を幼くすることと、親の要求を退けようとしている。しかし、一方において、自分にゆとりがあり、自信に満ちている時には、

Aは、新しいハシに対するコントロール感を持とうと、

自分から課題に挑戦している。

△事例3—5△

家族四人で楽しい夕食のひと時を持つ。AもBもよく食べる。Aはミソ汁を残そうとするので、私が、それ位は食べるよう言うと、「それじゃあ、食べさせてよ、ぼくと代わりばんこでいいからさー!」とAは言うので、私はそのAの提案に同意する。食後のアイスクリームに私は、リキューをかけて食べている。子どもたちは、興味津々でそれを見ている。

(家庭にて)

食後のだんらんのひとコマである。Aの心の動きを追つてみると興味深い。Aはミソ汁を、本当は残したかったのだが、何とか飲もうとしている。以前であつたら、このような時には、もつと気持ちをこわしてしまつて「たべさせてー!」と叫んでいたであろうが、この時は、「代わりばんこでいいからさー!」と自分の方から歩み寄つてきている。私は、このAの、以前に比べて自然な振舞いを見て、その提案に同意する。

Aは、麦茶をティースプーンに一杯取ると、お酒ですと言つて、自分のアイスクリームにかけている。それを見たBは、ぼくもと言うと、もう食べ終わつたアイスクリームの皿に、麦茶をコップから入れ始める。溶けたアイスクリームと麦茶が混ざつて、何とも言えない白濁した液体が出来る。Bは、お酒ですと言ひながら、おいしそうにそれをすすり始める。Aと私は目を合わせると、小声で「おい! あれがおいしそうだつて、ウへー!」ときさやき合

う。Bは、その話がきこえてもかまわず、平氣で飲み続ける。しばらくすると、なんと、AがBに向かつて「そのお酒、少しちょうだいよ!」と真顔でたのむ。Bはだめだと言うので、私も一緒になつてBにたのんで、やつと小さなグラスに半分だけ分けてもらう。Aは嬉しそうにそれを口にすると「ウへー、まずい!」と一言。皆、大笑いする。

（家庭にて）

食後のだんらんのひとコマである。Aの心の動きを追つてみると興味深い。Aはミソ汁を、本当は残したかったのだが、何とか飲もうとしている。以前であつたら、このような時には、もつと気持ちをこわしてしまつて「たべさせてー!」と叫んでいたであろうが、この時は、「代わりばんこでいいからさー!」と自分の方から歩み寄つてきている。私は、このAの、以前に比べて自然な振舞いを見て、その提案に同意する。

食後の時、Bの作った気持ちの悪い飲み物を前にして、Aも初めは気持ちが悪いと思ったのだろう。その時のAの気持ちは、私の側にいた。

しかし、あまりにおいしそうにBがそれを飲んでいるのを見ているうちに、Aの気持ちはBの世界に移り、B

のカクテル？をほしい気持ちが、Aの中に起つている。そして、やっと分けてもらったカクテルではあるが、いざ、それを口にしてみると、意に反して、とてもそれを、おいしいとは思えず、AはBの世界の住人になることは出来ないことを感じていたのだと思う。

Aは、これまで、自分に向けられた課題に苦しくなった時、自分の気持ちを幼かつた時に向け、何も出来ない自分に戻ることで、相手からの被コントロール感を拒絶し、同時に、そのネガティブな主張を（本当は出来るのに出来ないと言う事）親に認めさせることで、親へのコントロール感を取り戻そうとしていた。その時、弟Bの存在は、あこがれと、しつとの対象となっていた。しかし、Aが自分自身を取り戻すなかで、実際に、二歳の弟の世界に入つてみると、もうAにとって、そこは、安住の地とはなり得ない現実を知る。この事例は、楽しい時におけるAとBのやりとりであるが、この中にも、内的

な世界を整える努力をしているAの姿が見られて、興味深い。

(5) 自己に対するコントロール

コントロール感を持つことについて、これまで様々な対象を通じて考えてきた。こうして考えてみると、対象の多様性と共に、コントロールそのものにも二つの種類があることが明らかになってくる。本項においては、コントロールを、その意志の持ち方によって二つに分類し、自己に対するコントロールとの関連の上で考察してみたい。

(A) 二種類のコントロール

人生の初期において、特に母親が乳幼児の気持ちに応えようと配慮する中から、乳幼児が母親に対してもコントロール感を持つことについては、すでに述べてきたところである。

第一のコントロールは、乳幼児が母親に対しても持つこ

のようなコントロール感に代表されるものである。これ

は、自らは、全くその思い方を変えることなしに、自分の思い通りに対象を変化させようとすること、すなわち、相手が自分に合わせてくれる中で得られるコントロール感である。この種のコントロール感を得るために、相手が常に本人に従つてくれている必要がある。このように、相手の変化によって得られるコントロール感という意味で、私はこれを△受動的なコントロール▽と呼ぶことにしたい。（△の受動的なコントロールは、幼児に多く見られるものの、けつして幼児だけのものではないことを明記しておきたい）

他方で、子どもがモノに対するコントロール感を得る過程において、子どもが、自分の思い方を調整して行かなければならぬということについても、すでに私は述べてきた。すなわち、子どもは、水を高い所に流そうと思つてゐる限り、けつして水を思い通りにコントロールすることは出来ないのであって、水を低い所に流そうと思つて初めて、水に対するコントロール感を得るこ

とが出来るのである。

第二のコントロールは、このように、モノへのコントロールに代表されるものである。これは、自らの思い方を調整することで、対象に対するコントロール感を得ようとするものであつて、自分の思い方の方を対象に向けて変化させるという意味で、私はこれを△能動的なコントロール▽と呼ぶことにしたい。この能動的なコントロールは、モノに対する場合よく見られるが、社会的な場面においても重要なものであろう。

以下においては、前述の△受動的なコントロール▽と△能動的なコントロール▽を、自己を対象とするコントロールの中にはめて、人間がその内的世界を広げてゆくことと、自分に対して自由になることの関連についても考えてみたい。

(B) 自己に対するコントロール

これまで私は、二種類のコントロールについて述べてきたのであるが、△の受動的コントロールと能動的コ

トロールを、「自己に対するコントロール」にあてはめて考えた場合、どのような違いとなるであろうか。

最初に、自己に対する受動的なコントロールを考えた時、自分の一つの思い（考え方）に自分を、合わせていこうとする姿勢が、そこに浮かび上がってくる。これは見方を変えれば、自分の中にある一つの思いにとらわれてしまつて、それ以外の考え方が出来ずに、その考え方から自由になれない状態と見ることも可能であろう。

これに対して、自己に対する能動的なコントロールにおいては、自分の思い（考え方）の方を、自分に合わせていこうとする姿勢であつて、ここに、執着といつたような自分のこだわりから自由になる姿を見出せるである。

例えば、「自分に対する劣等感」を例にあげて、これに対する二つのコントロール感の違いについて考えてみよう。前者においては、自分の劣等感そのものをなくそうとのみ努力を続け、劣等感の対象そのものがなくならない限り（本人がなくなつたと思えない限り）、自己に

対するコントロール感を得られないものである。

これに対して、後者においては、劣等感を感じているその気持ち 자체を変化させるべく、自分の気持ちをコントロールしようとするのである。このように、自己に対する能動的なコントロール感とは、自分の感じ方、考え方



方から自分自身を自由にすることであると換言してもよいであろう。そして、その事が結果として、自分に対する劣等感自体をも克服させてしてしまうことが多い。

しかし、自己に対する能動的なコントロール感を持つことは、実際には、大変に難しいことであって、全ての人間が負っている人生の課題であると言つても過言ではないであろう。そして、またこの課題は、人間が、自分一人の力だけで成し遂げられるものでもない。そこには、周囲の人間の暖かい交わりと援助が不可欠である。

以下の事例は、この大きな問題を語るには、あまりに小さな事例ではあるが、幼い人が、幼いなりに、この課題に挑戦している一つの生の姿として、ここにあげておきたい。

△事例3—6△

Aは、朝から機嫌が悪い。着替えを親に手伝わせ、朝食のしたくの間も、Bをいじめ、わざと泣かす。目覚めの時を振り返つてみると、Bが先に起きていて、Bの声に対しても「うるさい！」と怒鳴ったのが、本日の第一声であつ

た。その後も、食卓にはなかなか付かず、皮をむいて出されたゆで卵を見ると、自分でむきたかったのに、と言つてひと泣きする。次には、いつも食べているサラダが嫌だと

言つて、食事中にイスから降りて床に寝てしまう。私は、気付かないふりをしてあまり注意をせずに、食事を続けている。Aは「今日は、保育園には行かない！」などと、一人言風につぶやいている。そして十分位寝ていただろうか、Aはおもむろに起き上がると、もつと食べると言って、一人でパンを焼き始める。焼き上がったパンを私にくれ、後にスマーズに食事を続け、保育園のしたくをして、家を後にする。

(家庭にて)

起きた時から、Aの心の中には、モヤモヤとした不充実感があつたようだ。自分が目覚めた時に弟が、すでに起きていたのが一つの原因かもしれない。不機嫌なAは、一つ一つのことを弟と比べ、手をかけられているBをうらやましく、憎らしく思い、自分も母親にBと同じか、それ以上のことを要求する。要求をかなえてもらえば、一応の満足は得られるものの、Aの本当の不機嫌の

原因は、母親に自分の出来ることをしてもらいたい、といふことにあるのではないようだ。

ゆで卵の皮をむくということは、母の手伝いの一つで、着替えのように、当然自分でやる事という訳ではない。Aが自分で出来、またそれを要求されている着替えは、自分でやろうとせず、しなくてもよい手伝いである、卵の皮むきをしたかったと言つて泣く様子に、この子どもの不安定な心を見る。

この不安定なAの気持ちを修正させた要素はいろいろあるであろうが、一つは、親がAの、このイライラに付き合つたことであり、もう一つは、Aがテーブルの下で寝るという「間」としての時を持ったことであつたと思う。

子どもが自分の気持ちを壊してしまつてゐる時、それに付き合う大人もまた、随分イライラさせられことが多い。子どもをきちんとさせたいという、親のしつけ感覚を刺激される面も多いと思うが、より深い所で、子どもとと同じレベルで、イライラしている大人の心があるよ

うに思う。この朝も、もしも、親が生の気持ちで、子どものイライラに対応していたら、以下のように子どもに対する可能性はあると思う。(1)着替えを自分でするように言って、全く手伝わない。(2)弟をいじめないように強くしかる。(3)ゆで卵に関しては、せっかく書いてやつたのにと怒る。(4)食事中にイスから降りてしまふ事を注意する。

この日に、これらの注意を全くしなかつた訳ではないにしても、Aの行動を強く規制しなかつたこの時の親の対応が、ベストであつたかどうかは、わからないことである。ただ、親としては、Aのネガティブなこれらの振る舞いの奥に、自分でもコントロール出来ないA自身のこじれた気持ちを感じ、少し様子を見ようとしたのである。

Aが、机の下に寝てしまつたのも、「再生の時」と考えると興味深い。(本田和子)一九八〇『子どもたちのいる宇宙』は、子どもが身を横たえる中に「時の更新」「再生」といった意味を見い出し、考察を加えている。Aは、

自覚めの時からの不機嫌な気持ちを、親に対する受動的なコントロール感を得ること——親に依存的になる事——で解消しようと努めたものの、親が自分に応えてくれた後にも、イライラした気持ちを修正することは出来なかつた。Aが食事を中断してしまつたのも、A自身が、

その時の自分の気持ちを受け入れられなくなつた事の一つの象徴と見ることも可能であろう。それ故に、しばらくの間、Aは「死ぬ」(寝る)必要があつたのである。『再生』したAは、自分からパンを焼き始める。食事も食べられなかつた少し前とは、打つて変わつた様子である。Aにとって、パンを焼くとは、少し背伸びした仕事である。以前に、母親が病氣で起きられなかつた時があつたが、この仕事は、その時に、父親と食事を作る中で、私がAに教えたことであつて、ガスや火を一人で扱つたのも、この時が初めてであつた。Aにとって、このように「誇らしい仕事」の象徴であるパン焼きを、再生後に、自分から始めようと思つた事は、大変興味深い点である。

このように、本人は意識していた訳ではなかつたであろうが、親の援助はあつたにせよ、Aが自分の気持ちを自分の力で修正できたこと、すなわち、自分の気持ちを変えることによつて、その状況を乗り切れたことは良かったと思う。

この日の出来事は、取るに足りない小さなことである、しかし、この小さなことが繰り返され、重ねられて行くことこそが、生活そのものに他ならない。そして、この小さな出来事の中で、Aが自己に対する受動的なコントロールを能動的なコントロールへと、変容させられたという事実を大切にしたいと私は思う。自分の問題は、結局自分で解決するしかないのであるから。

——おわり——

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

参考文献

本田和子 一九八〇『子どもたちのいる宇宙』三省堂

村上敏子先生の臨床報告は、今回で終わります。障害のあるなしにかかわらず、お互いをよく知り、認め合うこと、人として大切にされ生かしていくことの重要さを感じています。一年間、どうもありがとうございました。

今月から、高原典子先生の「絵本の世界」が始まります。大堀優子先生のエコ便りは、今年は偶数月に連載されます。どうぞよろしくお願ひ致します。
「よし藤・子ども浮世絵」を書いて下さった中村光夫先生は、現役の小学校の先生で、よし藤の研究家、コレクターでもあります。よし藤の浮世絵を見てみると、江戸の末期の子ども達の生き生きとした生活が見えてくるようです。動物や道具やほおづきなどにおきかえて描かれた「人物」は大人の生活を子どもに伝える教科書の様もあります。又、この絵は、切りぬいてめんこやさせかえ人形にしたり、絵本や立体組み立てにもなります。これに近いものが、私の子どもの

頃にもあったように思います。めんこ、紙のきせかえ、ぬり絵、付録の組み立て等…。ほんの二、三十年前まで、こんな世界がまだ残っていたように思いました。今の様に、こんなに物の豊かな時代ではなかつたけれど、小さな駄菓子屋さんの店先に、子どもの世界が広がっていました。

幼児の教育 第九十卷 第二号
平成三年二月一日 発行
編集兼発行人 本田和子
発行所 日本幼稚園協会
印刷所 東京都文京区大塚二一一一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
株式会社

定価四一〇円（本体三九八円）
(一九九一年二月号)

平成三年二月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

印刷所 東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

株式会社

東京都港区三田五一一二二一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 ○三一二二九一一七七八一

発売所 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一一

振替口座

—新幼稚園教育要領と実践へ—

新 幼稚園参考書

その教育と運営

全日本私立幼稚園連合会監修／東京都私立幼稚園協会編著

「幼稚園参考書」が生まれ変わりました。幼児の自発性を伸ばすには——遊びの総合性をどう組み立てるか——新しい教育要領をふまえた『新幼稚園参考書』は先生方の強力な助つ人です。



目次より

第一章 幼稚園教育の本質を考える

- 1 幼児が育つことと幼稚園教育
- 2 幼児を理解する
- 3 幼児の生活とは
- 4 教育要領改訂の視点ととらえ方
- 5 幼児教育の内容と方法
- 6 私立幼稚園の特性と存在の意義

第二章 幼児の教育を計画し実践するために

- 1 教育課程・指導計画を考える
- 2 指導計画作成のポイント
- 3 指導計画の実際例とその展開
—長期・短期、年齢別、保育形態別

第三章 幼児の生活を考え充実させていくために

- 各園の実践例から—主体的生活・行事・総合性・領域・障害児

第四章 園やクラスをいきいきと運営するために

- 1 園運営の基本的考え方
- 2 クラス運営の実際
- 3 保育の担い手としての保育者

第五章 幼稚園教育の歴史と展望

B5判・上製本・436頁・定価4,000円（本体3,883円）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

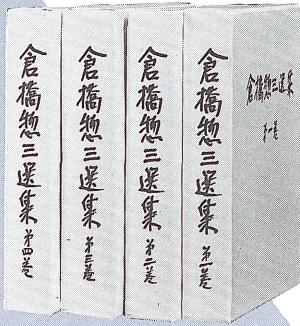
キンダープックの
フレーベル館

倉橋惣三選集(全4巻)

B6判 上製本ケースつき

東山魁夷装丁の美装本!!

わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・隨筆などを大成した定本です。今でも保育界において読み、語り継がれています。保育者にとっての座右の書です。



| | |
|-----|-------------------------------------|
| 第1巻 | 幼稚園真諦・子供歌謡・フレーベル/416頁/定価2,300円(税込み) |
| 第2巻 | 幼稚園雜草/448頁/定価2,369円(税込み) |
| 第3巻 | 育ての心・就学前の教育他/472頁/定価3,000円(税込み) |
| 第4巻 | 保育案他/456頁/2,472円(税込み) |



生活をつくる 子どもたち

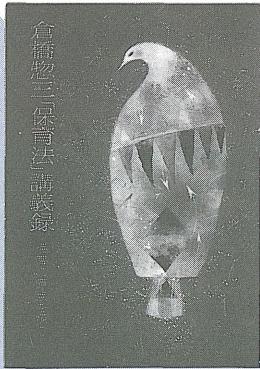
倉橋惣三理論再考

倉橋惣三の保育理論を
実践に基づいて確認する

倉橋理論実践園の保育を調査研究し、子どもの生活、発達、就学後の成績、母親へのアンケートなどから、この理論の重要性を改めて実証した労作です。

飯島婦佐子・著

A5判・244頁・定価1,700円(税込み)



倉橋惣三「保育法」講義録

保育の原点を探る

保育の原点は、自ら育つ子どもにあるとする倉橋惣三の保育法。新幼稚園教育要領の精神の源です。

- 昭和10年、倉橋惣三が最も熟した時に行なった保育法の講義録です。
- これからの子ども主体の保育への数々の提言がもりこまれています。
- 幼稚園真諦他の著作と対照し、理解の助けとする、脚注付です。
- 新幼稚園教育要領と関連する箇所も示されています。

菊地ふじの・監修 土屋とく・編

B6判・256頁・定価1,500円(税込み)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館